

國學院大學

博物館學紀要

第 4 輯



1979

國學院大學博物館學研究室

國學院大學
博物館學紀要

1979年 第4輯

特集・樋口博士古稀記念

発刊の辞	加藤有次	1
樋口博士略年譜		2
一層紀要の充実を	樋口清之	3
先史時代遺跡資料の造形保存法	加藤有次・森山哲和・金山喜昭	4
考古学資料復元に関する一試案 — とくに土器類の復元について —	青木 豊	25
博物館学的発想（仮称）にもとづく考古学調査 — 小平市鈴木遺跡の場合 —	金山喜昭	36
田中芳男と神宮農業館	矢野憲一	46
武州歴史民俗資料館の活動	白井孝昌	55

— 発刊の辞 —

樋口博士古稀を迎えて

加 藤 有 次

わが国における博物館学の体系的試みは、棚橋源太郎先生の「博物館学綱要」にその曙光を発し、その論理をうけて「博物館法」の成立をみ、社会教育における博物館の振興とその人材育成に努めるようになった。本学でも早速、「博物館学講座」開講に尽力されたのが樋口博士であった。

先生は昭和初年若き頃より物質文化に絶大な関心を寄せられ、博物館の重要性を知り、棚橋先生の国立科学博物館での諸講座に参加し、ご教導を仰がれたと伺ったことがある。そして「日本石器時代人身体装飾品の考古学的研究」で学位をとられ、さらに考古学・歴史学・民族(俗)学・人類学等広範囲の学域に立って、人類の歴史を究め、また人間の生活科学史・生活文化史といったように次々と諸科学の間隙をついで、人間史の多角的体系化にいとまされてこられた。それは学際的であり、その理念が先生の博物館学に関連してゆく緒があったのであろう。この学問的方法論こそ博物館学的方法論といえよう。その成果は、必ずや大衆に還元するという終局的目的をいつでも忘れていないことであった。そんなお考えの中で、本学に考古学資料館の設立を実現させ、資料の収集・保管活動およびその活用之余念なく、昨年3月設立五十周年を迎えたのである。

先生は、昨年めでたく古稀を迎えられ、東京ホテルオークラにおいて五百有余名の来賓を招き、記念祝賀会を開催できたのも、日頃の先生のご人徳とでもいえるであろう。この日を迎えるまでには、国学院大学はもとより他大学にもおよび永い教壇生活と文部省社会教育委員・学芸員資格(無試験)認定委員や放送・その他ジャーナルにおいてご活動をつづけ、その結果昭和47年に紫綬褒賞、昭和50年に日本放送文化賞、また昨年は勲三等旭日中綬章を受賞された。学会においても全日本博物館学会を育て、現在では日本風俗史学会理事長としてご活躍をされ、その他数々の学会・社会において業績をつままれてこられた。

特に本学の博物館学講座には情熱を傾注され、20有余年の歳月をご指導されて誠心誠意よき博物館人育成に努めてこられたのであるが、ある時この紀要第1輯を刊行する際、永く続刊できればと私に暗示をなされたことがあり、左の如く第3輯で途切れてしまった。予算の問題もあったが、その頃より全日本博物館学会の設立準備およびその運営事務に全力をかたむけてしまった。そのため第4輯刊行ができなかったというのは、私の微力とする他ないのであるが、他に約20年の間お世話してきた全国大学博物館学講座協議会事務局も学会事務局と同様他大学にてお引き受け下さるという昨今で、ようやく研究室内にも安堵の気配を感じるようになった。

しかし樋口先生も47年間の永きにわたり本学でのご薫陶をおえ、私共浅学菲才の身に一抹の不安を覚える次第であるが、ここで再び本講座を隆盛の軌道にのせねばと奮起し、ここに第4輯を新しき門出として「樋口博士古稀記念号」と銘うち刊行の運びとなった。

先生におかれては、本学名誉教授・考古学資料館名誉館長として、まだまだ後進のご指導を頂きながら、門弟一同先生のご健勝を祈念する次第である。(國學院大學教授)

樋口清之博士略年譜

- 明治42年1月1日 奈良県桜井市にて樋口清二の長男として生る。
- 昭和2年3月 奈良県立畝傍中学校卒業
- 昭和7年3月 國學院大學史学科卒業
- 昭和7年4月 國學院大學助手
- 昭和9年3月 國學院大學研究科修了
- 昭和9年4月 國學院大學講師
- 昭和20年4月 國學院大學教授
- 昭和20年9月 青山学院女子専門学校講師
- 昭和24年4月 國學院大學学生部長・相模女子大学兼任教授
- 昭和26年2月 学校法人國學院大學評議員
- 昭和27年10月 大正大学兼任講師
- 昭和28年3月 國學院大學図書館長
- 昭和29年4月 高崎経済大学兼任教授
- 昭和30年3月 文学博士の学位授与、文部省社会教育局「学芸員資格認定に係る無試験認定の審査委員」
- 昭和32年6月 全国大学博物館学講座協議会委員長
- 昭和36年4月 日本女子大学講師
- 昭和40年 日本放送協会「学校放送養いの歴史番組委員会委員」
- 昭和45年3月 学校法人國學院大學評議員
- 昭和47年 紫綬褒賞受賞
- 昭和48年 全日本博物館学会代表委員、日本風俗史学会理事長
- 昭和50年4月 日本放送文化賞受賞、國學院大學考古学資料館館長
- 昭和53年4月 日本博物館協会理事
- 昭和54年3月 定年により國學院大學文学部教授を退職
- 昭和54年4月 勲三等旭日中綬章受賞
國學院大學名誉教授
國學院大學考古学資料館名誉館長



一層紀要の充実を

樋口清之

本学に博物館学講座が設けられて、もう20年餘を経過した。当初は文部当局も、学芸員養成を大学に全面依託するについての、単位の数についての基準は決めていたが、その内容のカリキュラム的なものは全て五里夢中で、ただそれまでの文部省の学芸員養成講習会案の内容を参考に、自主的に検討してほしい、と言った一見寛大で、じつは甚だ漠然としたものであった。当然、文部省の承認を得るための申請書の上ではどの大学もほぼ同様のことを書いたのに、実際各大学の担当者の会議を持ってみると、甚だ不統一、精疏の差の甚だしいのに、世話役を買って出た私共は驚いた。そしてその結果生れたのが、全国大学博物館学講座協議会であり、つづいて、全日本博物館学会であった。そこで、各大学のカリキュラム表が交換されたが、どうしても出していない大学、甚だしく格差のある大学とまちまちだが、それは各校の自個反省を待つ以外ないので、そのままにして来た。とくに実習の点で大学博物館を持たない大学の方が多いので、修了者の現場での実務能力の極端な差を作って、ある地方では、大学の学芸員有資格者というものを信用しないところすら出て来た。一方国では国立社会教育研修所で、学芸員養成の講座を開くことになった。もちろんこれには一定の制限はあるものの、相当整備された内容で、すぐれたベテランを講師陣に集めている。このままで行けば、名目だけの大学出の学芸員は、いつれ淘汰される日も遠くないと思えるのである。

そこで、問題は、各大学は在学中の学芸員養成に一層真剣に取り組むのはもちろんだが、その背景とアフターサービスのための、母校関係教職員と、出身学芸員の博物館学研究業績の発表機関を確保し、活字化によってその新知識情報をたえず流していくことである。それが、この紀要の発刊であって、その内容は、各自の研究発表、体験報告と、他校、他国の研究動向の情報を中心とし、併せて、最近日ごましい勢いで開発されている科学技術の応用法の紹介、新設館園の新らしい運営法の紹介などを行って、卒業学芸員の生涯教育と連絡機関にならなければならないと思う。もちろん紀要であるから研究発表を中心とするものだが、その何パーセントかは卒業学芸員の再教育にあてられることは、この場合一つの特色として認められてよいと思う。もちろんこれが必要なのは、学芸員の再教育と情報交換の会誌風のものが将来刊行されるまでの漸定的な処置としてである。

将来、その学校卒業の学芸員の評価の、一つの尺度にこの紀要がなり得ることは必然だと思うので、これから一層の努力をつづけなければならないと思う。

一方、現在日本の博物館事業は、地方の経済的成長と共に、日ごましい発芽期を控えている。すでに、プランの決定したもの、建設中のものなどを推定すると、既設のものとの合計3,000館に近くなることそう遠いころではなさそうである。その中で本学卒業の学芸員は、現在のところ甚だ口はばったことだが、大学中では最多であることは言うまでもない。しかし、各種の館園で独自の活動をつづけて居られるじつに頼母しい方々が多い。20年あまりの博物館学講座の成果が具体的に実を結ぼうとしているのを見て心から喜しいと思うと同時に、今日まで育てて下さった加藤教授はじめ先生方や、護って下さった先輩各位、それに日本の博物館界の各位に心から御礼を申し上げたいと思うのである。

本学博物館学紀要の出版に当って、その創刊以来いささかの関係を持った一人として、ここに感想をのべてその一層の充実を祈ることにした。

(國學院大學名誉教授・國學院大學考古学資料館名誉館長)

先史時代遺跡資料の造形保存法⁽¹⁾

Methods for Preserving The Immovable Features of Prehistoric Sites

加藤 有次⁽²⁾ ・ 森山 哲和⁽³⁾ ・ 金山 喜昭⁽⁴⁾
Yuji Kato Tetsukazu Moriyama Yoshiaki Kanayama

1. はじめに
 2. 造形保存とは
 3. 詳細
 4. 博物館資料への活用
 5. おわりに
- a. A法・離状剥離
- b. B法・接状剥離

Archaeological remains are generally classified as movable artifacts and immovable features. In this report we illustrate ways for preserving the immovable remains and discuss the necessity of these for providing balanced museum exhibits. Unfortunately, in Japan the objectives of archaeological excavation did not include the preservation of immovable features until very recently, as compared with other countries, resulting in a lack of specialists and the slow development of the methods required for preserving such remains. There are three ways to preserve an immovable feature intact: by making a replica which does not damage the original object, by making peels to which only the surface of the feature adheres, and by making laser holographs of the feature. So far we have used the first method to preserve clusters of burnt pebbles in Pre-ceramic sites and dwelling pits in Jomon sites. We have used the second method to preserve the stratigraphic profiles of Jomon pits and shellmounds and the natural layers of geological and archaeological sites. Laser holography has not yet been tried. These replicas and peels now give more realism to the exhibits in archaeological and historical museums and preserve additional data for general education and later research.

1. はじめに

今日的にも又過去に於いても、遺跡という名の空間の消滅、あるいは損傷に於て数限りない苦い経験を持つのは現実である。如何にしたら遺跡空間が保存の対象になりうるか、更に捕獲法が調査の資料に、又将来の生きた資料として記録保存と同じ価値を持てるか。その辺から考えを進めてみたいと思う。その一つの試みとして新しい視点から“留消遺物”と言う遺物にスポットを当ててみる。そもそも留消遺物とは、視覚的であり、又触覚的である物質を指す意味と、いまひとつは思考(アングル)等の抽象的な意味を持つ物を指す場合で、前者は物質的不動産である。地層、地相、遺構、その他の土坑などの視覚的に存在しやがて消滅して行く物、つまり移動的に不可能な物を表わし、後者は遺跡の全貌の推

測や推論、及び時代的アングル、又は発掘技術、発掘方法などのその時代の特徴を含む現象などをさす。

今回は、思考(アングル)については触れず、具体的題材(物質的)として述べてみたい。

遺跡調査に当って、“遺物”即ち、物質として移動可能な物は、すべて、記録処理をして後に撤去し、整理、保管へと搬入される訳である。しかし遺構類、地層、地相、及び、遺跡その物の状況等の移動不可能な物、つまり、不動産の処理については、写真と実測図などの記録保存のみであり。一部で、科学分析、あるいは、標本的発想としてのみ、土壤採取をしているに過ぎない。その他については“留消遺物”としての取り扱い方かたは皆無である。それは、その物が不動産であると言う事と、もうひとつ調査の内容に、“留

消遺物”なる物が、その内容に如何なる価値を持たずかと言う事の、確認の不十分が原因であろう。又その利用法、あるいは、指導方法についての明解なる説得がなされていないからであろう。今後の調査の内容と、捕獲技術の向上があれば、調査、及び資料の内容に多大な視野の広がり、提供出来ると確信する。然れば、つぎに“留消遺物”の捕獲の方法について、具体的な工法を分類しながら述べてみたいと思う。

まず、捕獲法の種類として、3種類の工法がある。A法は、“離状剥離”。B法は、“接状剥離”。そしてC法は、“メディアム (medium)”で、これらを総称して、“造形保存”と言う。

2. 造形保存とは

造形保存とは、ある媒体を通し、視覚的又はその物の空間の立体的捕獲が目的であり、第2の目的は、搬出、搬入等、保管の簡便さである。更に第3の目的は、恒久的処理により、長期保存、展示の可能性である。この3つの要素は、いつも同時に考えて行くべきである。それは保存物が、ややもすると学研的資料から逸脱し、孤立化する事をさけられるであろうし、更に後世の研究者にも生きた資料として送り届けられるだろう。造形保存を解くに当り、以上の目的を遂行するために、左記の工程の体系で、各々が処理される。そこで、それぞれの評量値を図式化してみたい (図1・2)。

3. 詳細

造形保存をするに当って先にも述べたが、捕獲の方法として次の3種類に分類して工法とする。

A. 離状剥離、B. 接状剥離、C. メディアム (medium)。

A法・離状剥離は、従来レプリカ方式、又は型取り方式と言った名称で呼ばれた工法である。これは、遺物 (現体) に損傷を与えずに

⑤ 処 恒 理 久	④ 処 表 理 面	③ 処サア 理リク セ	② 処 耐 理 久	① 処 捕 理 獲
保護膜形成 表面処理	洗滌・整形 剥離・搬出	記載事項の添附 斜角度、海抜を記入	裏面補強 主剤に対する補強	整地 アングル

図1. 技術工程

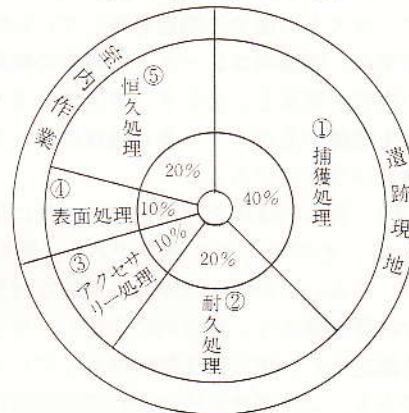


図2. ウェイトの割合 (計量値)

表面及び、側面の立体型体の型だけを記憶して来る特性を持つ。つまり現体より、ネガ (凹型) を取り、その上にポジ (凸型) の工程に至り、現体の実物大の模型を作ると言ったケースである。しかし、この離状剥離については、レプリカとは異り、ネガ (凹型) から、ポジ (凸型) に至る中間において、新しい試みがなされている。それは現物をそのまま使用する事である。

B法・接状剥離とは、被着体の表面を接着の要領で、表面のみ剥離して来る工法である。これは従来、切り出し方として、樹脂等によって固型にして切り出す、通称、羊羹切りとは大変異なり、表面の剥離 (接着) であり、完成品は、表面が、逆向である。架橋反応利用の薬品反応のため、数ミリ単位の厚さで捕獲出来、それは、ジュータン式 (巻物) とな

る。更に恒久（不変性）的にみても、優れている。

C法・メディアム（medium）

（その1）映像を媒介として、被写体を捕獲する方法で、従来のカメラ等の一点透視法と異なり、多点透視法及び、レーザー光線によるポリグラフィーの利用法である。ポリグラフィーは室内の再生スタジオで再生する事によって、原寸大の虚像となり、それは、スケールにより、実測も可能で、室内で現地実測可能となろう。ただし、この方法は、まだ実験の段階で、コストの面での問題を残しているが、近い将来は、実測のコンパクト、再生の確実性等の内容を見ると、必らず、考古学に多大の威力を発揮するだろう。多点透視法は、ステレオカメラ方式である。

（その2）物質的媒体を利用して他の物に置き替えて、その物とする場合である。即ち、土、石、あるいは合成樹脂等の、異質な材質に完全に置き替えて、視覚的に伝達し、その状況を固定化し、更に恒久的に保存していく方法である。この度はC法についての詳細は割愛する。

a. A法・離状剝離（写真1-44）

ここで紹介するのは、縄文時代の住居と、先土器時代の礫群の捕獲法である。

住居跡などは、大変大きな物もあり、又大変複雑な物もある。この両者は、材料の選び方によって、それぞれの特色が失なわれずに、又材料費の節約にもつながる事である。

まず、住居等の大型、あるいは広範囲に捕獲したい場合には、石膏で凹型（ネガ）を取る方法である。それに複雑さが加わった場合は、その部分のみシリコンを用いる事を勧める。全体が非常に複雑で、然も細部まで、微細に凹型を取りたい場合は、全体にシリコンを使う方法が適している。ここでは、シリコンの要領と、石膏の場合の両方を詳解する。

いずれも、現場から凹型（ネガ）を取り、それをさらに遺跡から搬出して、凸型（ポジ）

にする訳であるが、ネガとポジは、それぞれ独立した工程を持っているので、この紙面では凹型（ネガ）の制作のみにした。なお凸型（ポジ）の材質を詳解しておく、F.R.P.（強化プラスチック）や、石膏、又はセメント等があるが、F.R.P.が恒久的にみても、又簡便さについても手頃である。

次に先土器時代の礫群の捕獲は、石の群であるから、材質はシリコンを選ぶと良い。極薄（3mm）にして、ガーゼで補強すると、複雑な石も安定した型取りが出来る。礫群の離状剝離の特色は、礫（遺物）その物を埋込んで、そのまま保存出来る事である。つまり土壌の部分が模型で礫（遺物）が本物であるという事である。これは現場のそれぞれの礫の傾斜や、相対関係が室内観測に置きかえられ、更に、B法（接状剝離）とセットにすれば、地相の礫群と、その断面とが同時に、記録される。又、保管も厚味を抑えれば1㎡の広さで10kg程になり、積上げ方式がとれる。

例1. 敷石住居（凹型制作） なすな原遺跡 シリコンの場合

準備する物・材料〔シリコンRTV12-1㎡当5kg, ガーゼ-1㎡当30cm×6m, 石膏-1㎡当8kg, 木材角材1㎡当4cm×3cm×180cmを3本, ポリバケツ大小4個, 計量器（g単位が計量出来る物）, ゴム手袋, 鉄ベラ（攪拌用）, ハサミ, ノコギリ, カッターナイフ〕
シリコンは一般に注型用として販売されているRTV12が適当である。硬化剤を規定量添加することによって40分～80分で硬化し、温度15℃～30℃内であれば安定である。注型剤としては、他の薬剤にみられぬ安定度であるが離型剤の使用に十分注意されたい。他の品物と異なり、遺物と言う貴重な物質であるがゆえ、離型剤の選定に配慮を有す。土器、炭化物、石質等は、油性の離型剤でなく、水性の皮膜を形成する物が望ましい。当者は、カリ石けん液を5%濃度の物を霧吹状にて2回散布した。

捕 獲 処 理

写真1.

その留消遺物の本質は、どのアングルで捕まえると抽出できるか、検討する。

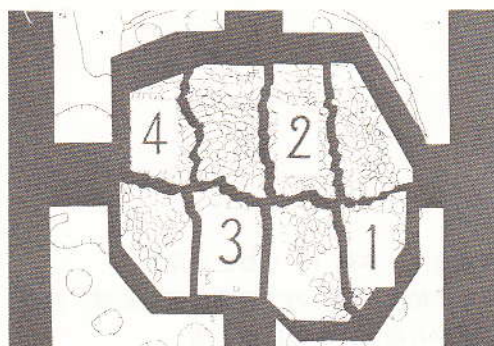


写真2. (整地・整形)

注型の精度のため出来るだけ異質物は、取りのぞく。電気クリーナー使用。



写真3. (区 割)

アングルの境界線もあるが、大きな物は分割して採取が必要である。



写真4. (塗布事前)

離型剤、散布又は塗布。

- 湿度の多い場合は少なく。
- 乾燥の場合は2回塗り。



写真5. 本剤（シリコン）塗布
非常に粘度が高いため谷間に留らぬ様、注意しながら塗布。均等になる事。



シリコン使用要領の図解（1㎡あたり）

第1段階	第2段階	第3段階	仕上げ
シリコン 3kg	ガーゼ 全面（1.5㎡）	シリコン 2kg	シリコン 1kg
30g		18g	8g

・気温20℃、湿度50%、晴天、乾燥中
・乾燥時間 1000g：10g
・作業時間 約30分

写真6.
添加の要領と塗布の回数の図式

耐久処理

写真7.（ガーゼ又は綿布による補強）
全体に平均して膜になる様にハガキ状の大きさに始めに裁断しておく。シリコンの白色と混迷しない色に始めから、着色しておくと便利。



写真8.
シリコンは軟質状のためその上部に、石膏で全面をパネル状にカバーする。





写真 9.
さらに木組、枠を形成し、パネル状とする。



写真 10.
分割面ごとの、パネル状完成。



アクセサリー処理

写真 11.
搬出後の現地再元の場合に必要な工程。
海拔、位置(グリッド)、斜角度等を記憶させる。



表 面 処 理

写真 12.
上部、石膏パネルを取り去った後、下部のシリコンマットを剥離にかかる、平均に45度程の角度に力を集中して引張りバネを利用すると、理想的である。

写真 13. (搬出)

平面に列べるので、遺跡と同じ程度のスペースがあると良い。各1個体60kgに考えて制作すると運搬に3名程の人数ですむ。



写真 14. (洗浄)

シリコンマット、凹型(ネガ)の表面及び裏面を水洗いにて良く洗浄する。



写真 15.

陰乾の後、裂傷部分はシリコン用接着剤でガーゼをペースにしながら裏打する。シリコンにより凹型(ネガ)の完成、凸型(ポジ)への工程は原物(遺物)を埋め込む方法とプラスチック又は石膏による方法がある。



例2. 柄鏡形住居(凹型制作) はけ上遺跡 石膏の場合

準備する物 石膏—1㎡当12kg, スタッフ—1㎡当1kg, 木材—1㎡(3cm×4cm×180cm)を4本と(5cm×7cm×180cm)を2本, 水洗い場, 水, ポリバケツ大2個, 小4個, ノコギリ, ハサミ, カッターナイフ, 木づち

写真 16. 捕獲処理

大きさに順じて分割する、1個単位60kg程度。



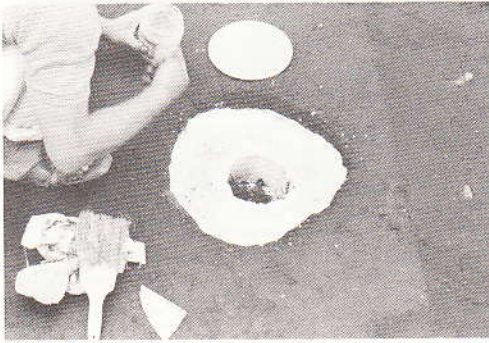


写真 17.
柱穴、炉、土壇は各々 1 個体にしておく。



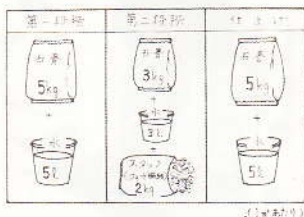
写真 18.
広い面積の場合は足場の関係上、対角区分順に流し込む。
乾燥約 80 分。



耐 久 処 理

写真 19.
スタッフ（ジュート繊維）による補強。

石膏 (A) 使用要領の図解



・乾燥条件 雨以外可
・硬化剤 (A) 1 回 1 回 (2 回)
・所要時間 各 30 分

写真 20.
添加の要領と塗布の回数図式

写真 21.

パネル状にするため、30cm²位の方形になる程に小割を碁盤目状に配分する。



写真 22.

配分された小割を鉢巻状にスタッフで固定する。



写真 23.

角材（太目な木材）を全体の力のかかる所に配分する。



アクセサリー処理

写真 24.

方向、海拔（レベル）、斜角度等の記憶のための基準柱。

反転の際の脚ともなる（1個体に4脚）。

個体ごとに通し番号を記入。



表 面 処 理



写真 25.
剝離凹型（ネガ）内側から分解していく。



写真 26. (搬 出)
日照で乾燥させ、附着の土を払い落す。石膏材のため、水洗いは避ける。



写真 27. (整 形)
分解の際の外傷は石膏で修正、遺跡外に搬出。



写真 28.
凹型の反転、及び組立。継ぎ目は、裏側より、石膏により接合。

写真 29. (凹型の完成)

凸型(ポジ)には、強化プラスチック(F.R.P.)を使用。



例 3. 礫群の凹型制作 鈴木遺跡

準備する材料—シリコンの場合と同じ。

写真 30. 捕獲処理

礫群の場合は、造形保存をする礫群のみならず、遺跡全体、地層、地相の総合判断で、典型を抽出する事が望ましい。礫群の群の組成の特長をつかむ。範囲は、群には必ず流れという現象があり頭と尾、左と右、立置と平置、上部と下部、空間と密集度を一組として捕まえる。空間とは、物の相対関係に於いて、生成するもので、留消遺物には不可欠である。

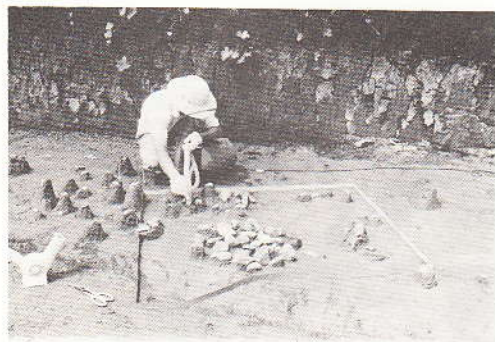


写真 31. (区分)

切り金帯 (0.27mm厚×5cm巾)、壁立 3 cm程に埋込む。



写真 32.

離型剤としてカリ石けん溶液5%を2回塗布。





写真 33. (シリコン流し〔塗布〕)

石の頭と側面に十分気をつけ、筆等を使って完全に膜とする。1㎡ 3名～4名で対岸に分かれ、他人の死角をカバーしながら区画しつつ、完成していく。



写真 34. (シリコン取り扱い方)

硬化剤は1000：10の割合で気温20℃で、30分～40分で硬化する。

硬化剤を添加したら、5分～8分程良く攪拌して全体に十分、練り込まれている様に心掛ける。



写真 35.

分離帯、及び壁面上、筆等で塗布する。



耐 久 処 理

写真 36.

礫群の粒が小さければ、ガーゼを名刺大に裁断し、全体に空気が籠らない様に、貼る。ガーゼに着色したりして、工夫してみると、貼り落としなどの見落しがなくなる。

写真 37.
シリコン部分が硬化して、次に石膏でパネル
状に固める。

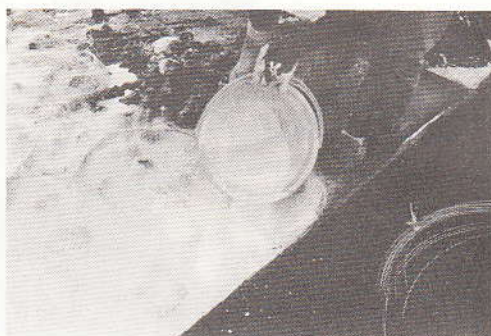


写真 38.
木枠を固定して、パネル完成。

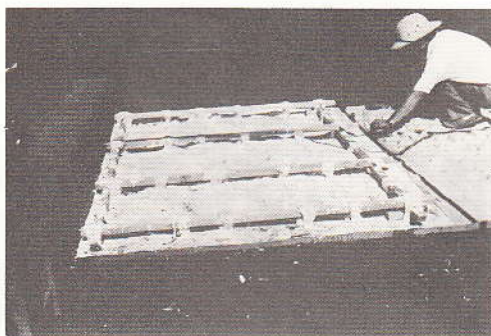


写真 39.
剥離



例 4. 礫群の凸型制作

鈴木遺跡

写真 40.





写真41.
凹型に礫（現物）をはめ込む。



写真42.
離型剤を塗布し、弾力性のある石膏（石膏＋ウレタン）を流し、固定する。
木枠で補強した後、全体を逆転させる。

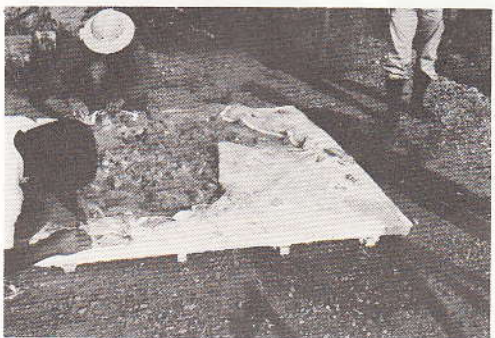


写真43.
上部のパネルを外す、サンドイッチ状になったシリコンカバーを取り除く。



写真44. （礫群の復元完成）
各礫の位置が固定されているので、このまま
保管ケースとしても利用できる。

b. B法・接状剝離 (写真45-55)

この方法の特質は、広範囲に採取出来る事である。遺跡の留消遺物を考える時に、まず地層等は、非常に広範囲に及ぶ物である。これは深さにも言える事で。試掘等で非常に深く採取する事が可能である。重量も厚さ数ミリで1㎡で2kg程である。これは特に貝塚断面の捕獲や、礫層断面など表面積の大きい物に適している。水分の多い地帯での接状又は、捕獲した後、水で洗淨出来るのも特色である。以上の特色から考えてみると、留消遺物と言う遺物の捕獲の現実性が浮彫となるであろう。従来の標本的部分的な採取法から、大きく飛躍して、遺跡全体が又は、それに近い発想で留消遺物を見直せるのではないだろうか。

捕 獲 処 理

写真45.

生活面が切り合っている場合や、攪乱と覆土、更に自然面と生活面といった様に相対的に組合わさった状態を捕獲する。

準備する材料は一接着材H.O.N.(考古造形研究所が独自開発したポリウレタンを主成分とした接着剤)、ガーゼ、綿テープ、記録用カード、ポリ容器、ヘラ、ハケ(広範囲の時はコンプレッサーにより吹付がよい)、防護メガネ、ゴム手袋。

例5. 縄文時代の土壇の場合 鈴木遺跡

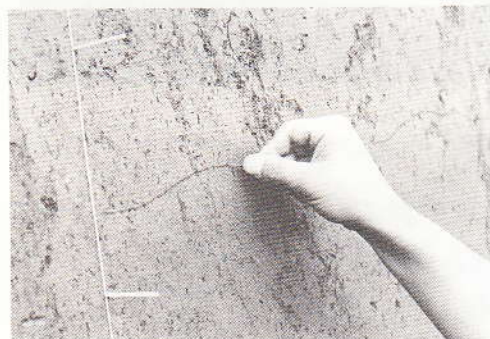
土壇、ピット、その他の遺構の断面は、その生活面で始めて姿を表わすもので、断面の作制には、更に、その姿より拡張しなければならない。しかし、発掘中の地層の中に断面として表出したら、それも留消遺物である。この土壇は、発掘境界断面より、土壇の断面が表出した例である。表土よりローム層まで、完結したまれにみる土壇である。



写真46.

(整 地)

ローム層などは針でセクションを引く、層位ごとに、層位番号を逆文字で記入しておく。

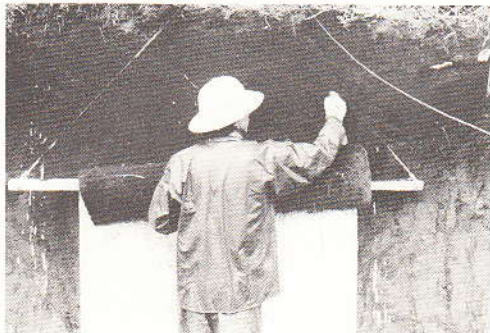




耐久処理

写真 47.

材料は1㎡当接着剤H.O.N. 3kgを2回に分けて塗布（ハケ）1回目の塗布の後ガーゼを全面に張り、更に綿テープを30cm間隔で格子状に接着させる。2回目の塗布は仕上げ用である。



アクセサリー処理

写真 48.

海拔、経緯、グリット、採取年月日、遺跡名等を記入。

この記載事項は必ず剥離の前に準備しておく。



表面処理

写真 49.

搬出して、洗浄して、陰乾、乾燥（3日）した時点でジュウタン式に巻き保管。



例 6. 地層の場合

はけうえ遺跡

写真 50.

層位のセクション、層位番号、針で書き込む。

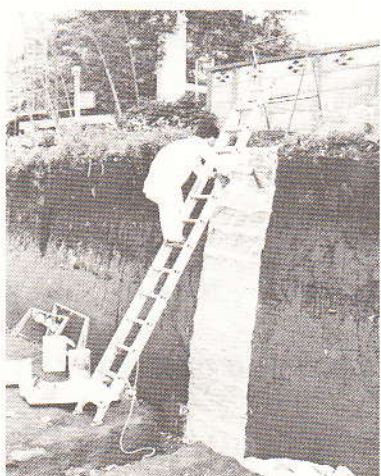


写真 51.

下部層から、上部層へと塗布してゆく。



写真 52. (剥 離)

円筒物に巻き込みながら、下ってゆく、加重を利用すると剥離が楽である。

重量 1㎡当り 3kg.

例7. 貝塚層の場合

伊皿子遺跡

捕獲処理

写真53.

遺跡全面を捕獲の対象とする場合は、搬出・搬入の事を考え、1枚単位重量は100kg以内に作る。(大きさについては折り畳めるので関係ない)。接合の部分は、ボルト・ナット式で再構成が可能である。重量1㎡当り12kg。

アクセサリー処理

写真54.

耐久処理が終えた時から、トリミングを始める。海拔、斜角度、経緯、グリットなど記載。展示用の金具類も、この時に接着。

表面処理

写真55.

(洗 浄)

不要な土、未接着の具はすべて洗い流す。

恒久処理

各々、剝離してから3日程で乾燥するのでクリーナーで完全に表面を清掃する。欠落の部分は補強する。その際の接着剤は、ウレタン系の接着剤を選ばなくてはならない。

保護膜は、つやが、出来るだけ少ない物を選ぶ。展示の事も考えると、つり手、又はつり金具を背面に取り付ける用意が必要であるが、まず、軟質で弾強性のある全体を固定する案を考える。50kg以内の重量の物であれば、そ



のままの状態を保管や展示が出来る。50kgを越える物については、板状に固定するか、又は、布で裏打するかのいずれかである。この場合前者は、ベニヤ板12mm厚の物をパネル状にしてウレタン系接着剤で貼り付けする。後者は、綿か麻布(キャンバス布)を接着(点留で良い)し、その上につり手金具を着ける。

4. 博物館資料への活用

以上の成果は、博物館的観点に立脚を合わせれば、考古学資料を物質的「物」から博物

館資料である「もの」^(註1)へと質の転換化を実施した一証と見做すことができる。つまり先史時代遺跡の不動産物である住居跡、土坑、層位等は、従来の考古学調査において写真撮影、図面化という記録保存に終始していたが、造形保存を用いれば、それらを実物あるいは三次元の復元が可能となり、それは学術的、教育的に、より一層の活用性が期待できるからである。

次に造形保存物の博物館資料中での位置づけ^(註2)及びその活用性について述べてみる。

博物館資料を製作上、形質別に分類すれば直接資料と間接資料に大別することができる(図3)。実物そのものを対象とする直接資料と、実物を形成する形質・性状等と同じく、または異にするもので表現した資料、いわゆる間接資料の2つに分類できる。ことに後者は、製作加工することにより博物館資料として生まれるものである。

さらに、資料製作法の立場から分類すると、まず資料の実物そのものでも、生きた動物・植物資料であれば、繁殖・育成することで資料の増加と考え、一次製作資料となる。また、実物資料及びそれと材質を異にする素材を併用して、新たな資料を製作するジオラマ等の場合は、第二次製作資料と考えられる。

標本は、きわめて広範囲な種類であるが、実物そのものの全部またはその一部を資料とする場合と、実物のもつ形質・性状をそのものの以外の素材で表現製作した資料の2種に分けて、前者を第一次標本、後者を第二次標本として区別することができる。

こうして、博物館資料とその製作は、博物館活動として、学術研究はもとより、視聴覚

教育資料としての効果を高め、教育普及に成果をあげる等の多大の使命をもつことになる。

そこで、本稿で扱う造形物は、この分類中でどこに位置づけられようか。そのものの製作法や性状によっても異なるが、まず敷石住居例は凸型(ポジ)への工程で原物(敷石)を埋め込めば第一次標本となるが、プラスチックあるいは石膏による方法をとれば第二次標本に位置づけられる。礫群例の場合もやはりこれと同様である。また柄鏡形住居例は凸型(ポジ)に強化プラスチック(F.R.P.)を使用するので第二次標本となる。そして接状剥離による土坑例、貝塚層例及び地層例は実物によるため第一次標本と見做せる。

特に、第一次標本に当該する諸例は、従来その内容範囲内ではまかない切れないものである。既に第一次標本は、資料として対象となるものをある一定の大きさに形を整え不要な部分を除去し、必要に応じて加工を施したものできわめて単純な標本調整法(例えば地学標本等)である普通標本・主として動物・植物を対象とした生物標本で、生物体をそのまま乾燥した乾燥標本・植物を圧して形を整えながら乾燥した腊葉標本・動物標本製作法の一つである剥製標本・乾燥標本とは対照的に全く性格を異にするもので、動物・植物の腐蝕しやすい部分を保持するための液浸標本・プラスチックその他の透明な物質で生の資料を封入標本して包む埋没標本・さらに顕微鏡観察に供するプレパラート等がその主なるものとして掲げてきた。しかし、今回造形保存による第一次標本には、新たな項目を付加しなければならぬ。そこで、敷石住居例と礫群例のごとく凹型に現物を利用した場合を、

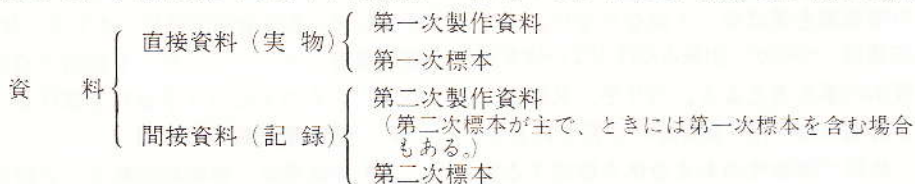


図3. 博物館資料分類

その捕獲方法に従い離状剝離標本とし、又土坑、貝塚層、地層各例のごとく被写体の表面を接着の要領で、表面のみ剝離して製作する場合を、接状剝離標本と各々概念づけることにする。

また、これら造形保存の今後の博物館資料としての活用性及び方法はいかなるものであろうか。資料収集、整理・保管、調査・研究、教育活動から成る博物館機能のうち、それらの各々についていくつかの具体点をおり混ぜて以下述べることにする。

まず、資料収集はこの場合、造形保存法に換言できるが、その方法については先述したので割愛する。

次に、整理保管について敷石住居例や柄鏡形住居例の場合は、空間スペースが広く、しかも出土状態の景観を考慮すれば、野外展示するのが望ましい。一方、同じ離状剝離法を用いた礫群例では、展示に供することはもちろん、又全体をそのままの状態で収蔵保管することができる特性をもつ。そして土坑、貝塚層、地層各例である接状剝離標本は、ジュートン式（巻物）と異名をとるごとく、さほどの空間スペースを必要とせず、恒久的な接着力を保つので標本が剝落する心配もなく、整理保管に最適の条件をもつ。特に、貝塚層例について、保存科学的に比較し得る他例がある。千葉市加曽利貝塚博物館には、本館とは別地点に樹脂で固めた貝塚層を保管する施設が特に設置されている。しかし、その貝塚層は樹脂が水溶性である上に地中の水分がカビの繁殖をうながし、きわめて悪い保存条件下におかれている。その為該館は、現在カビを駆除する問題の解決に苦慮しているとのことである。これに対し、接状剝離法による貝塚層は、表面の剝離（接着）であり、又薬品の性質上からもカビの繁殖する危険性はなく、しかも人件費、材料費、施設費等の経費も少額ですむ利点を重ねそなえている。

博物館の調査・研究の成果は、現代社会の要求に応え得る姿勢をもつものでなければな

らない。それは、研究者の問題意識や調査・研究の技術的進歩をうながすことにつながる。そこで、その可能性に対応する為には、特に遺跡から出土する不動産物（遺構等）の資料化を従来の図面、写真の二次元物から造形物という三次元物及び実物に置き換えることが必要となってくる。しかし、この方法も将来にわたる技術的進歩のおかげで、新たな資料化法が別に生みだされるかもしれないが、少くとも現時点においては最善の策だという意味である。例えば、どれほど綿密な図面を作製しても、それは現在一般的な図面化のアングル（平面・断面方向）でしか、そのものを捕まえることができず、将来において別のアングルの要求が生じた時にそれに解答を下せない事態が考えられる。また、接状剝離標本の地層例では、現在のテフラ研究、地質研究、年代研究の智見を将来のこれら分析技術の進歩に応じて再検討を与えることができるという特性もある。

最後に、教育活動についてであるが、従来の考古学資料を展示する博物館では、考古学と言えど土器や石器等の動産物を想起させる程、遺物展示に偏向しがちであった。たとえ遺構展示といっても、ジオラマ復原のごとく利用者にその様態を解かり易く説明する方法はあるが、それは学術的資料としてはあまり価値がない。従来、造形保存が一般の展示に供しなかった理由は、思考性がなかったり、技術的問題、また専門家が不足していたからではなかったろうか。こうした我国の教育活動の現状に対し、例えばフランスのパリにある国立古代博物館（Musée des Antiquités nationales）は、上部旧石器時代のパンセバン遺跡（Pincevent）の遺物出土状態の造形保存資料、またニュースにあるテラ・アマタ遺跡博物館（Musée de Terra Amata）では、下部旧石器時代人が利用した住居跡を造形保存し、学術及び展示活動に役立てている。我国でも、利用者に、過去の人間生活状態を理

解させる為に、また学術的資料としても、造形保存の活用が望まれる。

5. おわりに

本稿は、造形保存法の具体例を中心に、またその博物館資料中での位置づけや活用性について述べたつもりである。ただし、問題として、なぜ造形保存をせねばならないかという疑問は、その手続きをとる以前の基本的テーマだろう。もの珍しさ、他者に対する優越感からくる「保存の為に保存」という収蔵趣味であってはならない。筆者らは、造形保存の理念を「学術、教育の為に保存」だと考えている。

また、本稿をまとめるにあたって、多くの方々の御指導、御協力があった。とりわけ資料提供に心地よく応じて下さった、なすな原

遺跡、はげ上遺跡、鈴木遺跡、伊皿子遺跡の各調査会の方々を銘記して謝意を表する次第である。

- 註1) 加藤有次, 1977『博物館学序論』雄山閣出版
- 註2) 加藤有次, 1969「博物館資料の修理と製作」
國學院大學博物館學紀要, 2.
- 註3) 筆者らの1人、金山が先頃バリの該館を訪れて実見した。
- 註4) MUSÉE DE TERRA AMATA『MUSÉE DE TERRA AMATA』

- (1) 1980年2月1日受付
- (2) 本学文学部教授
- (3) 考古造形研究所長
- (4) 本学文学部助手

考古学資料復元に関する一試案

— とくに土器類の復元について —

A New Method for Reconstructing Archaeological Objects

— Particularly Pottery —

青 木 豊

Yutaka Aoki

- | | |
|--|----------------|
| 1. 復元の目的と定義 | 4. 修復部着色の目的と意義 |
| 2. 石膏の補填材について | 5. 修理方法の実際 |
| 3. NEW FIGHTER - 5, No.28 ^{ニューファイターファイブ} について | 6. おわりに |

Everyone who engages in museum work finds it necessary at one time or another to reconstruct broken archaeological objects. Despite the ubiquity of this need, present methods are not wholly satisfactory, especially with regard to the reconstruction of pottery. Plaster is the most widely used material for filling in the missing parts of broken clay vessels. But plaster has several inherent problems: weight, lack of durability and difficulty in coloring. We have experimented with a number of other materials and found that a common car putty, New Fighter 5 No.28, works quite well. The photographs with this report illustrate several examples of vessels at different stages during the process of reconstruction.

1. 復元の目的と定義

資料は、現在に残された貴重な文化遺産であるから、これを永遠に残すべき観点から欠損資料に対しては、保存上「補強」としての修理が資料復元の第一の目的である^(註1)と考える。

次に資料が博物館等において展示公開され、観覧者の視覚の対象となった際、その教育効果の面からしても、そのままでは十分活用できず、教育普及の基礎となる視覚の点からも復元の必要性は当然生じて来るのである。

復元の目的は、以上二点の「補強」と「視覚」のいずれかの理由または両方の理由に対処すべく実行されなければならない。しかし、ただ単なる欠損資料の修理という理由のみによってなされるのではない。第一義的には、原形をあくまで重視し、類例から欠損部の形

態を忠実に復元することである。第二は、個々の資料に応じた材質感をも復元せねばならないことである。なぜなら観覧者の視覚上の要請に対応する場合、材質感、殊に色調は現存部と異なることなく、極めて近似した状態に復元し、本体と修復部^(註2)に異和感が生じてはならないと考えるからである。

修理の原則として、今日^(註3)尽しうる最善の技術をもって行なった復元修理であっても、明日には新たに考案されたよりよい方法に、とって代られることは容易に考えうることであり、いかなる方法も永遠に最高の方法である保障があるわけでない。修理箇所一つとってみても、当然長時間経過すれば補填材の老化、着色絵ノ具の退色等が生じ、再修理が必要となって来ることを復元時に考慮し、予め再修

理に対応した用意がなされて、処置されることが必要である。また、これは復元を実施する者の最大の義務である。このことに関して、個々の修理資料について、使用された補填材の種類、彩色塗料の種類、修理方法等々の復元の内容を記録した「資料復元修理カルテ」(図、1)を作成し、いつでも必要に応じて参照出来るように資料とともに保存すべきであると考える。

2. 石膏の補填材について

遺跡の発掘調査等により収集された考古学資料、縄文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器・陶磁器等の復元作業における欠損部の補填材としては、そのほとんどの場合において石膏を使用しているのが現状である。しかし、従来の石膏による復元に多くの深刻な欠点を有している。例えば縄文式土器・弥生式土器等の胎土が粗く多泡質であるものに関して、石膏は、極めて強力な接着性を発揮するが、精製土を使用した須恵器・陶磁器に関しては不十分である。修復部に力が加わった際、容易に離脱する結果となる。また硬化後の石膏は、少しの打圧等により表面が剝離する性格を有する為、資料の移動等の些細な事で表面、特に角の部分が剝脱する。

次に石膏は比重が大きいため、修復後は本来の資料欠損部の重量より、かなり重くなる。大型の資料で補填部も大きい場合、重量が増加し、資料の運搬移動にすら支障を来す事も生じて来る。なお、この重量増加の問題は、博物館等において現在展示物を見学者にふれさせる事はほとんどないが、今後この必要性も生じて来た場合、観覧者に誤解を生じさせる結果となり兼ねない。また学問的にも復元は、資料の重量をも復元すべきであると考えるところから、この重量問題の点が、石膏の第一の致命的な欠陥である。

修理箇所が広範囲で、数回に分けて石膏をといて使用した場合、それぞれの諸条件によ

り硬化度に差異が生じて全体的にもろくなる。採色の段階で、水彩絵ノ具を用いれば明確に判るが一筆で塗っても均一に絵ノ具がのらず、むらが生じ、ドーサ液を使用すればこの点は解決されるが、非常に困難である。

第二の致命的欠陥は「修理の原則」であるところの再修理に関してである。現在、補填材として石膏を用いて復元を実施したとしても、何年か先に、特に多湿場所に保管されていた場合は補修部分が老化し、接着部が本体と離脱するとともに、表面がバラバラと脱落する現象が起き、必ず再修理が必要となって来る。石膏の耐久時間に関しては、一つには修理者の技術に大きく左右されるであろうし、二つには保存状態、保存場所、活用頻度等々の幾多の状況により、的確なデータを得る事が困難であり、明確にする事は出来ないが、例えば國學院大學考古学資料館の収蔵資料の例では、昭和33年修理の山梨県御坂町井上出土の土師器、昭和45年修理の川崎市土橋出土の縄文土器、昭和48年修理の狛江市第1小学校出土の土師器、昭和48年修理の千葉県姿山出土の須恵器、土師器等々が現在再修理が必要となっている。すべてが石膏の老化に起因するものであるか、どうかは疑問であるが、早いもので6年、そして10年以上経れば、かなり劣化が進行するようで耐久限度を越える。しかも厄介なことに再修理の際には、本体に附着し、劣化した石膏を除去する事は容易でなく、土器本体をきずつける事なく、完璧に除去することは不可能である。「修理の原則」の再修理を想定し処置すべき点で好ましくない。

3. NEW FIGHTER - 5 No.28 について

補填材としての石膏の短所のみを述べて来たが、安価である点、取り扱いが簡単な点等の長所も認められる。しかし総合的に判断して補填材には適さないと確信し、石膏に替る補填材として「ファイター5」を実験的に使用し、価格の点を除き、石膏の欠点を補正出

来る結果を得る事が出来た。「ニュー・ファイター5、No.28」と言うのは商品名であって、ポリエステル系樹脂で、本来自動車の板金修理に使用されるショックパテである。この種のパテは国産・輸入品を合わせ、かなりの種類が市販されているが、その中のいくつかを実験的に使用した結果、アメリカ、Speedy Tool社の「NEW FIGHTER-5, No.28」が、すべての面で土器の復元に最も適していると考えられる。

まず取り扱い、石膏と同等か、あるいはそれ以上の簡便さを有している。本品に硬化剤を100:1の割合で混合し、欠損部に補充すると約3分後に硬化が始まる。この硬化開始時間は、硬化剤の量により調節する事が可能である。硬化が始まった時点では羊羹・プリン状で、軟質性に富んで居り、文様の刻み、余剰分の削り取りは至って簡単である。そして時間の経過とともに硬化度を増し、約1時間後に石膏の硬化時より、やや硬い程度に完全硬化する。完全硬化した後も彫刻刀での加工、紙ヤスリ作業等は可能である。補填作業の際、石膏の場合でも生ずる問題であるが、土器本体、または補填部以外に付着することは細心の注意をはらっていても回避出来ない事もある。この付着した場合は、硬化をまって、初期硬化の時点で爪先でつまみ、容易にはがし取る事ができる。この点は石膏より、取り扱いは極めて簡単で、土器本体をよごす事は全くないと言っても過言ではないほどに危険性は微少である。

第二の利点としては、資料の復元は補強を第1の目的としている点において、たとえ落した場合でも、本体に破損を受ける事があっても、補修部は全く異常がないほどの強度を有している。石膏にありがちな割れたり、欠けたり、あるいは表面に貝殻状剥離を生ずることは全くない。また前述した石膏では弱点であった精製された胎土をもつ須恵器・陶磁器等への接着力の弱さは、逆にファイター5は、

胎土が緻密なほど接着力は増大し、陶磁器等は硬化後、ただ力により離脱させる事は不可能なほどである。なお補填材としての基本的条件である硬化後の目盛り、ひずみ、膨張等の問題に関しても、何ら支障は認められない。

次に重量に関しては、石膏と比較して比重は石膏の約 $\frac{1}{3}$ であり、極めて軽量であるところから、復元後の資料の重量も当然石膏に比べ、約 $\frac{1}{3}$ と軽量になる。補強箇所の容積を変えずに、重いものを軽くする事は中空にするなどおよそ非現実的な工夫の実現以外には不可能であろうが、その逆は極めて簡単である。前にも述べた「土器の重量の復元」に関しても、欠損部を含めた資料全体の総重量を算出し、ファイター5に小石、鉛などを混入する事によって、資料の重量をも調節、復元する事が可能である。資料の重量復元は、教育・展示・保管・研究等のすべての面において、好ましい結果が期待できるものであり、この種の処置は必要である。

なお補填材として基本的な条件の一つであるところの、復元を対象とする資料の材質と同質か、あるいはそれに近似した材質を選定作成する点においても、有効性をもっている。即ち、ファイター5は、異物の混入が約40%まで可能であり、本体に類似した胎土を混和材によってつくりだす事が可能なのである。また、必要に応じて、ファイター5自体への着色も容易に実現が可能である。且つ強度が落ちない事はもう一つの大きな利点である。

次に補填材の老朽化及び再修理の問題であるが、石膏は前述したように多湿場所においては、極めて早く老化現象が生ずる。ファイター5の耐久性は未確認であるが、7年前に修復を行なった韓国出土の李朝、白磁、常滑焼蔵骨器等については、未だ何らの異常は現われていない。しかし、ファイター5本来の特性を考え合わせて、耐久度は半永久的なものではないかと考えられる。

着色に関しては、通常使用する水彩絵ノ具、

リキテックス絵ノ具、油絵ノ具、ラッカー、カシュー、泥にボンド等を混ぜ合わせたもの等、水性、油性を問わずいずれも一応着色可能である。但し、材質上内部に顔料が浸透せず、表面に皮膜を作る為、着色顔料自体に接着性のあるものが好ましく、リキテックス絵ノ具、ラッカー、カシュー等を使用すれば抜群の効果が発揮される。

以上補填材としてのファイター5について述べてきたが、再度要約すると、

- ①取り扱いが至って簡便である点。
- ②極めて補強性がすぐれている点。
- ③補填後、目べり、膨張、ひづみが生じない点。
- ④本体を変化、変質させる事なく、必要に応じて取りはずせる点。
- ⑤軽量である点。
- ⑥材質感、重量等の調節の為、異物の混入が可能である点。
- ⑦ファイター5自体に着色が可能である点。

等が上げられ、補填材としての条件を充分満たしていると考えられる。

4. 修復部着色の目的と意義

土器修理部の着色に関しては、従来無着色のままか、あるいは写真撮影の際、ライティングによるハレーションを防止する意味で、ただ単に同系色を着色する程度で済まされ、着色作業を軽視する傾向があることは偽らざる現状である。また着色の必要性の有無、色調をどこまで本体の色に合致させるのかなど問題がある。例えば、一見して、補修箇所が明確に判別できるように、敢えて本体と異なった色調を彩色すべきであるという意見も相当あることも事実である。つまり修理箇所が明確に識別できるほうがよしとされ、本体と同一色調を着色する事は避けられている場合も少なくないようである。もちろん復元箇所を明確にしておくことは、修理の原則でもあるが、しかし、それを着色により区別する方法

を取る必要は、全くないと考える。着色により区別する方法を取るのであれば、縄文土器の修復部に文様を模刻する必要性は、自ずと消滅するであろうし、類例から文様を修復部に作出するのは視覚効果を増加させるべく、極めて重要な意味合いを含んでいる。学術研究資料としての場合は、とにかく博物館資料として扱う場合は、視覚の基礎となる色彩を度外視することは、教育効果が十分発揮できぬばかりでなく、低下をまねく結果となるであろう。類似した例に、民家の移築、修復に関しては、欠損している柱等の木材も、それに応じた新材を使用しているが、色調は新材のままではなく、周囲にあわせて古色を施している。古社寺等の修復も同様であり、補填部を区別する方法としては充填した木材に焼印を押す等して区別し、採色・視覚による識別は行なっていない。もし、新材を新材（古色をつけず）として使用すれば、見る者にとっては、異和感のみが先行する結果となることは明らかである。古民家・古社寺の例からも、博物館資料は、視覚が基礎となる以上、修復部の着色も本体と同一色調に彩色すべきであると考えられる。こうした場合、基本的問題である復元箇所を観覧者に誤解を生じさせない為に何らかの方法で明示しなければならないわけであるが、この問題を解決する方法としては、土器の復元修理を実施する時、必ず個々の土器の修理カルテを作成し、修理箇所、欠損部の大きさ、土器本体の風化状況、接着剤の種類、補填材の材質、着色顔料の種類、科学的処理の有無等々を詳細に記入し、修理工程の写真、実測図を添付した先述のごとき「資料復元修理カルテ」を作成することにより十分に解決出来ると考える。そして、展示に際しては、復元前の写真を必要に応じて同時に展示することにより、見学者の理解と認識を深め、初歩的な誤解は回避できる筈である。

5. 修理方法の実際

土器片を水洗した後、自然の状態で乾燥させる。無理に火であぶる等して、急激な乾燥を行なうと歪みが生じ接着が困難になるばかりでなく、資料そのものの価値をも損失させる結果となる。次に個々の土器片の接着作業に移行するわけであるが、接着剤は接着を行なう土器の硬度（胎土、保存状況）により選択する。一般的には、セルローズ系のセメダインC、ツァボンラック等を用いる。エポキシ系のスーパー・セメダイン等は接着硬化後溶解できない為、後の再修理を考慮して避けるべきである。また縄文土器等の胎土が粗くもろい資料は、接着部をバインダー18等で事前にコーティングを行ない、その後セメダインCで接着すれば接着力は増す。

破片数が多ければ多い程接合後の歪みが大きくなる為、底部もしくは口縁部の一方向から接合を実施して極力歪みが生じないように注意する。そのためには、土器の要所要所を必要に応じて、紐でしばりつけながら作業を進める。

接着作業が終了すれば、再度土器全体を観察し、歪みの有無を確認し、欠損部分の補填作業に入る。欠損部分と同位置の現存部分の外表面、あるいは内面に粘土を押しつけて雌形をつくり、それを欠損部にあてがって樹脂を注入する。現存部分の型取りを外表面・内面のいずれでおこなうかは、それぞれの土器により異なる。外面型取りは、対象とする土器の外面（表面）に文様等が施されており、その文様を忠実にコピーする事により、欠損部に文様帯を構成させる場合は適している。逆に土器表面が無文である場合は、内面型取りを行ない補填した方が作業は容易である。というのは、補填作業も外部から行なえらるとともに、硬化後の表面調整作業も行ないやすい。外面型を使用した場合、補填・調整作業も土器の内部において実施しなければならないので、作業は至って困難である。また土器の表

面に文様のある場合でも、外面型取りで補填した際に現存部と欠損部との接点の文様の接合がスムーズにいかないことが多々あるところから、内面型取りで補填し、施文のパターンを割り出し模刻した方がよい。

型取り材は、一般的に粘土を使用するが、陶磁器等の釉薬の施されているものに関しては、油粘土を使用した方が作業は簡単である。しかし、それ以外の素焼ものに関しては、油が浸透し本体をいため、変色させる結果を招き易いので絶対に用いるべきでない。

なお、内面型取りに限定されるが、各種の型のゴム風船を用意しておき、修理土器の器形と類似したものを選び、土器内部においてふくらませて雌型とする。この方法は、欠損部分が広範囲であったり、数箇所に及んでいる場合は、一度で雌型が出来るのであるから極めて簡単である。補填材の硬化後、ゴム風船の空気を抜く事により雌型は取りはずせる。当然内面は、なめらかで調整の必要はない。

以上の様にして雌型ができれば補填作業に入る。ファイター5に100:1の割合で硬化剤を混ぜる。作業時間を考慮して、硬化剤の量で硬化開始時間を調節する。須恵器等の胎土の緻密なものはそのまま用いて、胎土の粗製なものに関しては、土器の胎土に応じた砂粒を混入し、本体に近い材質感を出すようにする。しかし、異物の混入は、強度の点からして約40%までを限度とすべきである。もしも、それ以上必要な時には二層に分け、第一層は異物を混入せずに使用し、補強を確保した後に再度、胎土に近い異物を混入した補填材を施す。また、アフターペインティングが好ましくない材質を有する資料には、アクリル系ラッカーをファイター5に直接混入し、補填材自体を必要に応じた色調に着色して使用することを考えてよい。

ファイター5は本来ベトベトした状態のものである為、垂直面にでも塗りつけることは可能である。細部等に流し込まねばならぬ必要

が生じて来た場合は、レジューサー（うすめ液）で適当な状態までうすめることも可能である。この場合も硬化後の目盛り等は生じない。硬化後、余剰分をカッター、彫刻刀で削り取り、不足部分は新たに重ね塗る。磁器等で、表面を極めてなめらかにする必要がある時は、耐水ペーパー・ヤスリで磨き上げて鏡面仕上に近い状態まで仕上げることができる。

次に着色については、前述したように水性、油性を問わず可能であるが、油性ペイントを塗布した場合が最も強固である。縄文土器、弥生式土器、土師器等は、ラッカーではどうしても材質感が伴わないのと、光沢を消し去ることが不可能である為、リキテックス絵ノ具を使用し、必要に応じて砂粒を混入して材質感を出させ、光沢に関してはマットメディウム（つや消し）を混合し調整する。須恵器、陶磁器の表面に光沢を有しているものは、油性ラッカーを用いコンプレッサーを使用し、吹き付けにより彩色する。ラッカーは、それ自体光沢を帯びているので、資料に合せて、フラットベース（つや消し）を混合し、つやの調整を行なう。フラットベースの混合は、ラッカーに対し30%までである。これ以上の比率で使用すると、塗装面への食い付きが悪くなり、後にペイントの剥落の要因となる。逆に光沢を帯びさせる場合は、着色後、その上にクリアー・ラッカーを塗布すればよい。吹き付け作業は、補填部の汚れや、付着物を完全に除去し、本体部に塗料がかからないようにテープ、紙等で完全におおった後、実施する。

着色作業で最も困難なのは、本体と同一色の塗料を調合する事である。焼物で単一色を呈するものはあり得ない。従って、一度で着色する事は絶対に不可能である。よく観察すると基調とする色があ

り、その中に黒、白、黄、茶、等々の各種の色が混和しあって、本体の色を形成しているから、先ず基調となる色を補填部全面にむらなく吹き付ける。次に混在している色を、一色一色入念に塗布する。この際は、本体部の色調を極めて入念に観察し、混和している各色の色調と粒子の大きさ、量をつきとめて同様の粒子を吹きつける。この作業は、スプレーガンのエア調節ネジで、噴出エアを弱くする事により、通常は霧状であるものが、径0.1mm～1.5mm位までの資料本体の粒子の大きさに応じた塗料粒子を選択して行なう。以上のように着色は、混在している各色の粒子の大きさ、量を見きわめ、数回重ね塗りすることにより、本体と同様な色調に近ずける事ができるのである。

なお、自然釉等がかかり、資料の表面が凹凸の激しいものは、リシガンを用いて、普通モルタル壁に使用されるモルタルの砂の粒子を資料本体の状況に合わせて、吹き付けた後に着色すれば、ほぼ同一の感じを出すことができる。

以上のように、須恵器、陶磁器等の釉薬の施された資料の彩色に関しては、コンプレッサーによる吹きつけ作業を行えば、絵筆等

資料復元修理カルテ

収蔵番号	K000	名 称	土師器 甕
時 代	奈良	出 土 地	神奈川県相模原市
収蔵年月日	53年 8月 10日	入 館 経 路	発掘調査による。
現在までの 復元の有無	⑤ 有。一年 月 日	復 元 者	
保存状態	良好	欠損箇所	口縁部、肩部、胴部、底部、その他
損 傷 材 種 類	ツルホレンラック	補 填 材 種 類	フイター 5 使用
着色塗料 の 種 類	ラッカー（カンパネラ）	着色方法	コンプレッサーによる。
保存処理 の 有 無	④ 無	方 法	絵筆による塗布
特記事項	〇〇遺跡の資料を類例に、復元した。		
写真番号	〇〇	復元年月日	55年 1月 20日
		復 元 者	青木 豊

●表面は、実測図、復元過程の写真を添付する。

図1. 資料復元修理カルテ

で着色するよりも数段の良好なる結果が得られ、視覚上の違和感を全く回避することができるのである。

6. おわりに

博物館における考古学資料の復元に関して、現在までに到達しえた最良の方法の一つとして、その内容を紹介したものである。勿論、この修理方法も、今後の研究によって改良され、あるいは他のよりよい方法によって替えられるべき日が来るかもしれない。補填材にしても確固たるものではなく、あくまで試験的に使用した結果、現段階における良好なデータが得られたに過ぎないのである。この補填材ともに着色剤とその方法に関しても、今後より一層実験、研究を重ね改良してゆきたい。

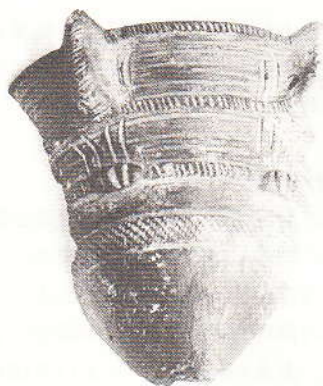
本稿執筆にあたり國學院大學名誉教授樋口清之、同教授乙益重隆、加藤有次、同助教授小林達雄先生方より御教導を賜りましたことを記し、末筆ながら厚く御礼申し上げる次第である。

- 註1) 加藤有次、1969「博物館資料の修理と製作」國學院大學博物館學紀要、第2輯、の中で資料の保存上、必然的に修理の必要性が生じてくると述べられている。
- 註2) 着色に関しては、多種多様な問題を含んでいるが、本稿、4の修復部着色の目的と意義の項で考えを述べている。

- 註3) 伊藤寿郎・森田恒久、1978『博物館概論』学苑社
伊藤寿郎氏が『保存と修理』の中で、「必ず再修理の事を考えて処置をとる」と修理の原則として明記している。
- 註4) あらかた水洗により除去した後、エアースラシを用いれば石膏は完全にはがれるが、結果として土器の表面を一度削り取ることになり、好ましくない。
- 註5) ファイター5の科学記号は、企業秘密とかで公表されていない。
- 註6) 約3分後にブリン状になった時が最も適している。硬化まえであると拭き取ることになり、本体の粒子間(表面)に残存し、光沢を帯びる結果となる。また硬化後時間が経過すれば、はがせない。
- 註7) 油性ラッカー、シンナーを希釈剤として使えるものならすべて可能である。
- 註8) ファイター5を本来の用途として板金修理に使用した知人の車は、修理後12年経過したが、修理部には何らの異常は見られない。車であるから、夏の酷暑、風雨等々の悪条件下においてである。
- 註9) 土師器、須恵器等の胎土の緻密な資料ほど確実に歪が生じる。
- 註10) 文化庁文化財保護部、1966『発掘調査の手びき』国土地理協会

- (1) 1978年1月31日受付
(2) 本学考古学資料館学芸員

1. 修理 前



2. 着色 前



3. 修理 後



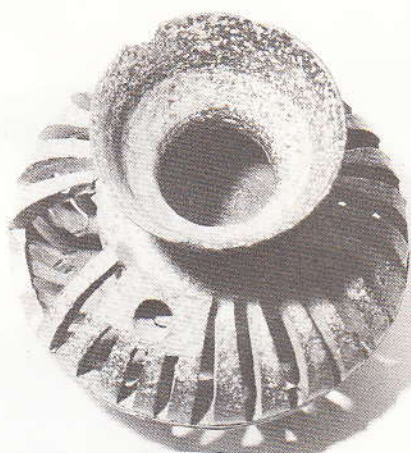
写真1. 縄文土器修理過程



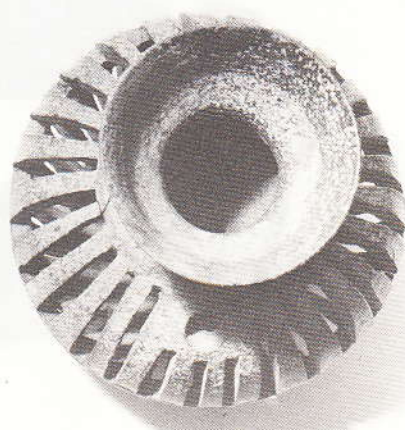
1



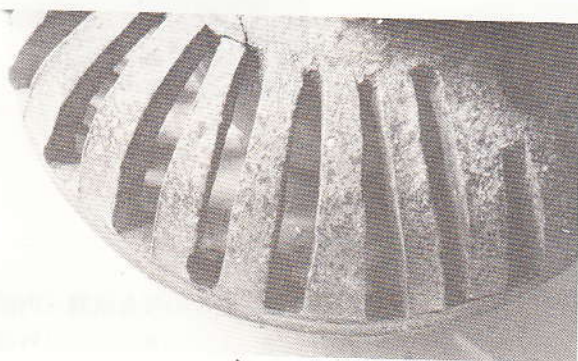
2



3



4

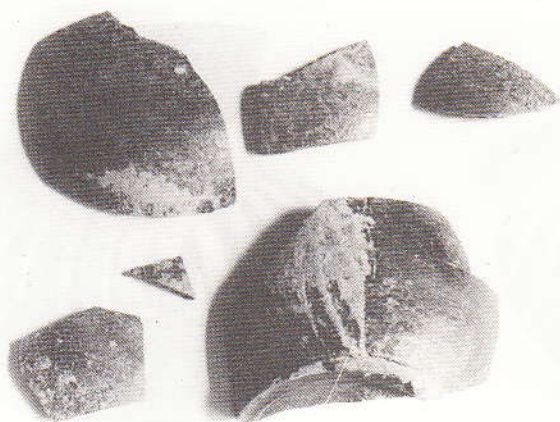


5

1. 修理前（側面から）
2. 修理後（ " ）
3. 修理前（上面から）
4. 修理後（ " ）
5. ↑印が修理部分を示す

写真2. 須恵器欠損部分の修理過程

考古学資料復元に関する一試案



1



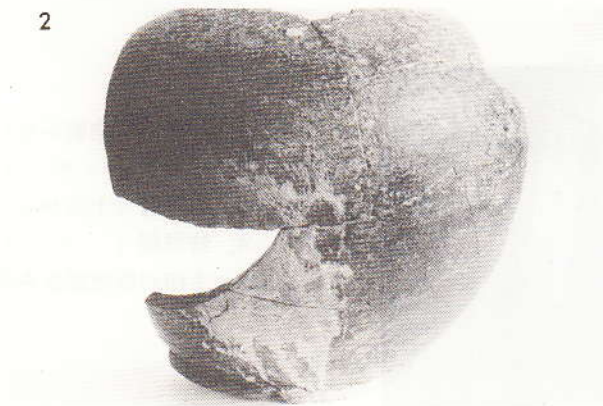
4



2



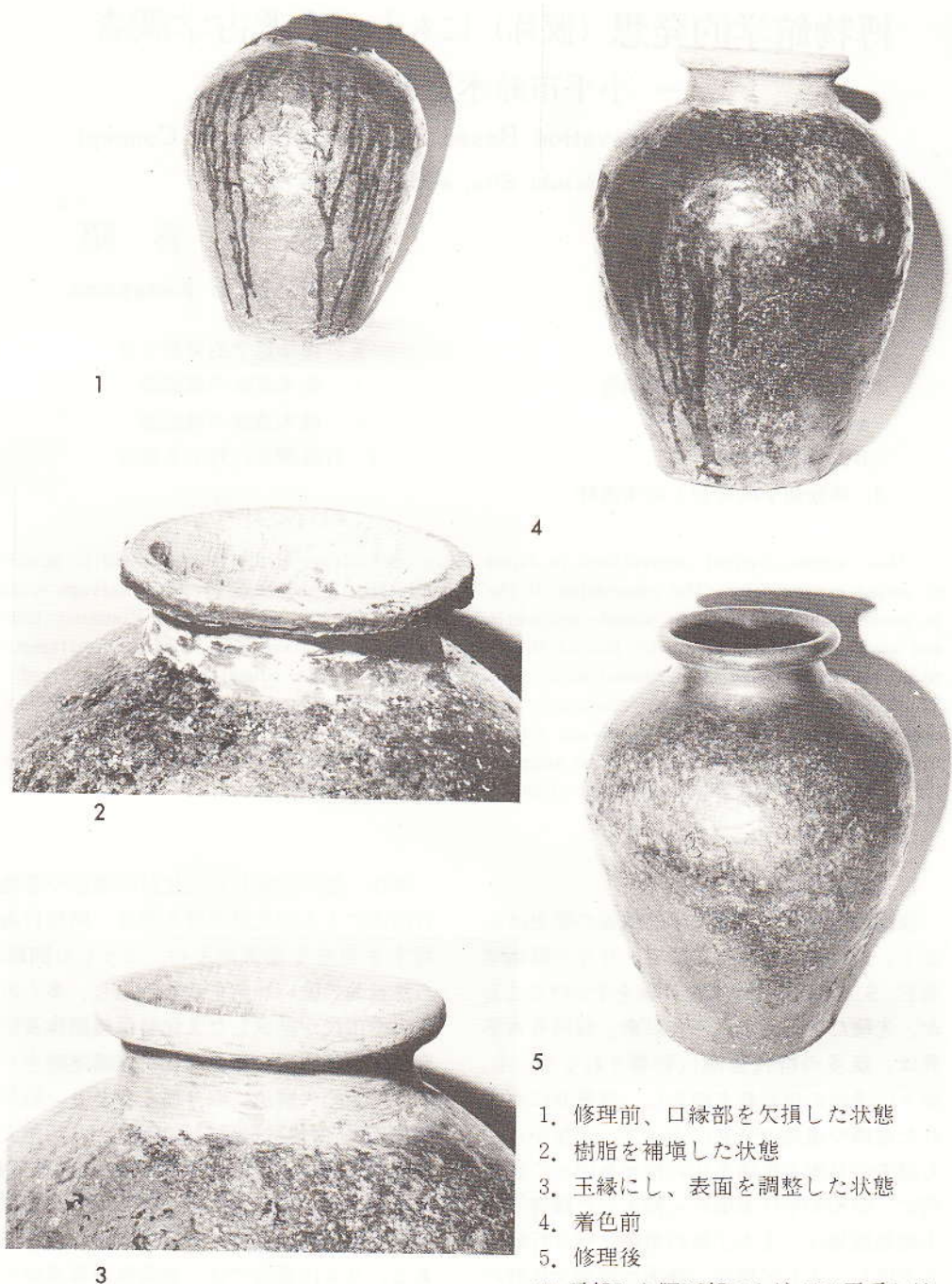
5



3.

- 1. 破 片
- 2. 破片の接合状態（内面）
- 3. " （外面）
- 4. 着色前
- 5. 修理後

写真3. 須恵器復元修理過程



1. 修理前、口縁部を欠損した状態
2. 樹脂を補填した状態
3. 玉縁にし、表面を調整した状態
4. 着色前
5. 修理後

※ 肩部から胴下部にかけての玉垂れは後のタールによる汚れである。

写真4. 陶器、口縁欠損部の修理過程

博物館学的発想 (仮称) にもとづく考古学調査

— 小平市鈴木遺跡の場合 —

Archaeological Excavation Based on a Museological Concept

— Suzuki Site, a Case Study —

金 山 喜 昭

Yoshiaki Kanayama

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1. はじめに | a. 博物館学的発想とは |
| 2. 鈴木遺跡の考古学的調査 | b. 鈴木遺跡の構成論 |
| a. 調査の経緯 | c. 鈴木遺跡の機能論 |
| b. 調査の成果 | |
| 3. 博物館学的発想と鈴木遺跡 | 4. 行政調査に対する警告 |

Most archaeological excavations in Japan today are salvage projects conducted in advance of major construction. The excavation of the Suzuki site is one such project. Salvage work is usually characterized by simple excavation without academic inclinations. Planning, time and staff are seldom adequate. But at the Suzuki site in Kodaira City, Tokyo, we attempted to do the work based on a museological concept. In other words, education was emphasized. Tours of the excavation were conducted, students were trained, exhibitions held and guide-books published. In addition, a 16-mm film was made showing the excavation, analysis and interpretations of the site. Such an approach to excavation is necessary if the general public is to understand the importance of our buried cultural heritage.

1. はじめに

我国の埋蔵文化財の科学的調査の歴史はふるく、近代史上明治10年にアメリカの動物学者E. S. MORSEが大森貝塚を手がけたことが、先鞭だと言える。それ以来、我国考古学界は、幾多の時代思潮に影響されながらも、徐々に遺跡の確認数を増やし、質量共に恵まれた遺構や遺物の発見によって、少なからずも過去の日本人生活文化の復元を図ってきた。特に、昭和30年代末頃から初まった政府の国土開発政策は、土木工事の事前に行う行政調査を促し、そして現在、我国の埋蔵文化財の取り扱い方は過去E. S. MORSEにみた学術調査はおろか、いたって場当たりで無目的な調査をなかば奨励しているかのごとくである。

現在、国が制定した文化財保護法や各地方自治体による文化財保護条例は、開発行為に対する十分な効果がない。こうした問題は、当然世論の強い批判をかもし出し、多くの文化人や市民が結成した文化財保護団体及び研究団体が積極的な埋蔵文化財保護運動をくり広げて、その解決に取り組んでいる。昭和30年代後半「文化財保護対策協議会」「関西文化財保存協議会」による平城宮跡の保存運動、又「日本考古学協会」が千葉県加曽利貝塚の保存を第29回総会にはかつて決議したことがある。さらに最近では、静岡県伊場遺跡の保存運動に対し、静岡県裁は文化財の指定解除処分の取り消し訴訟を文化人に提訴資格がないという理由で不審議の判決を下し、大いに

世論をにぎわせた。

しかし、このように埋蔵文化財保護運動が活発でありながらも、それがあと一步大衆のいずれもが共有する意識まで発展しない理由は、大衆にとって運動の論点が常に政治的次元に絞られ、専門知識が要求されるので、議論に参加できず埋蔵文化財の重要性が解かりにくいからではないかという疑問が残る。文化財は国民共有の財産という大原則がありながらも、保有者である大衆にその理解や認識が欠如しては、E. S. MORSEが唱えた歴史遺産と科学的精神の真髄を我々は我国の将来に伝達することはできない。

そこで本小稿は、小平市鈴木遺跡の調査を例にとり、考古学に門外漢のひとびとまでも埋蔵文化財やその適切な扱い方の認識ができることを検討し、多少の責務を果たしたいと考える。

2. 鈴木遺跡の考古学的調査

a. 調査の経緯

鈴木遺跡は、東京都小平市鈴木町1-481番地に所在する。東京都の西部、武蔵野台地上には、樹枝状に入る多くの開析谷がみられ、これらの谷に面した舌状地形面には先史時代遺跡が営まれることが多い。本遺跡もそのうちの1つにあたり、石神井川流域の谷頭部を馬蹄形状にとり囲んだ、先土器時代遺跡としては、比類なき大規模な遺跡である。

発掘調査は、市立鈴木小学校建設工事に先がけて、昭和49年6月に小平市教育委員会から委託をうけた鈴木遺跡調査団(団長加藤有次、当時國學院大學助教授、現在同大学教授)による試掘調査がなされ、遺物包含層が確認されたため、同年8月より本調査に移り昭和51年3月まで継続調査がなされた。その後、小学校に隣接する区域が都下水道局、市下水道部、都道建設局による建設工事の対象になり調査がなされ、そのうち都道建設局用地では今日もなお継続中である。試掘調査以来、

現在までの5年余りにのぼる調査期間のうちで、調査者が経験を積み重ねるにしたがい、遺跡、遺構、遺物の資料化への認識が徐々に洗練されてきた。発掘調査やその整理作業は日々継続中なので、本遺跡の全貌を紹介するにはまだ多日を用するが、まずここではここ2~3年間の発掘調査を中心に遺跡を紹介する。

b. 調査の成果

先土器時代遺跡の特徴は、縄文時代遺跡のごとく堅穴住居址や土器などの遺構や遺物は出土せず、もっぱら石器及び調理用施設として使われたと思われる礫群などに限られることである。本遺跡からはこうした遺物や遺構が立川ローム第X層(BP約30,000年)から第III層(BP約12,000年)まで連続し、10回以上にもわたる先史時代人の住み返えた時期を辿ることができるし、石器や礫群等の分布から各時期の生活舞台の様子を窺い知ることができる。ここに、その概略をのべてみる。

武蔵野台地の時期区分によれば、第I期から第IV期までに大別することができる。

第I a期(第X層~第IX下層)

約3万年前から2万5千年前に、鈴木遺跡に初めて先史時代人が到来し住みつくようになった。他のいくつかの遺跡でもこの時期から人間生活の証左をもち、すなわち武蔵野台地に人間が登場した黎明期といえよう。石器群は縦長の刃器状剥片が特徴になり、それを素材にした基部にわずかな刃潰し加工を施したナイフ形石器、円礫を荒割りしわずかな加工をもつ大形礫器、両面加工の楕円形の打製石斧、刃部を研磨した局部磨製石斧等を組成とする。遺構では幼児の頭大状の河原石を数個配置させたような配石といわれる遺構が特徴的に出現し、炭化物片が1箇所にとまった炭化物集中箇所もよく出土する。

第I b期(第IX上層~第V層)

約2万5千年前から約1万8千年前の頃になると、先史時代人の人口増加か、住みつく

回数が多くなったらしく、第Ⅱa・b期にかけて遺物や遺構の発見数を増してゆく。縦長の刃器状剥片の製作法は一段と発達し、ナイフ形石器は素材の形状をそのまま生かして基部や折断した部分に刃漬加工を施す。その他に彫器やスクレイパー、敲石等が見られ器種が多様性をもちはじめ。石器の出土は1箇所集中した状態をもつ例があり、その組成からナイフ形石器の製作址と推定される箇所もある。数十個から数百個の赤化あるいは黒色物が付着した河原石を1箇所に集中させた礫群が出現し、代りに配石が衰退する。礫群はその後の第Ⅱa・bに盛行するが、この時期の礫群は使用礫の大きさが拳大形礫に比べると概して小形品である点が特徴である。

第Ⅱa・b期(第Ⅳ層)

約1万8千年前から約1万6千年前までの時期と約1万6千年前から約1万3千年前までの時期。これらの時期は先土器時代で最も遺跡数が多く、それだけ人口が多かったのだろう。両時期を区分する理由は、年代差の他にナイフ形石器の製作法や若干の石器組成の違いがあるからである。ナイフ形石器は盛行し、スクレイパー、彫器、錐、礫器、敲石等、器種や石材の種類が極めて豊富になる。これらの石器群は多くが一定の集中箇所を構成し、石質別分類、接合関係等の分析によって各集中箇所についての場の機能が解明されつつある。礫群も非常に例数が多く、全国的にも南関東地方のこの時期が特徴的に出現数が多い。一般に使用礫の大きさは拳大形礫で、前時期よりも大きく、小範囲に密集した形態から広範囲に分散した形態まで数種類の形態差をうかがい知る。

第Ⅲ期(第Ⅲ層)

この時期と第Ⅳ期とは年代的にあまり格差がないらしく、両者は約1万2千年前前後といえる。この時期は細石刃、細石刃核を特徴とし、礫器や大形のスクレイパーが伴う程度で器種の種類はさほどない。第Ⅳ期とも共通す

るが、礫群は突然例数がとばしくなり、少数の礫群はいずれも小範囲に分散した形態を呈し、第Ⅰ期以来の配石が再出現する。

第Ⅳ期(第Ⅲ層)

大形両面加工の尖頭器に特徴をもつ。

鈴木遺跡と我国先土器時代研究上の意義について述べると、武蔵野台地の石器群変遷を層位学的知見と、各時期の生活面の構成を立体的に把握できたことがあげられる。全国的に先土器時代の偏年体系は、適切な資料の欠如によって、いまだに不完全な状況であるが、本遺跡はその問題に必ず寄与し得ると確信する。なかでも第Ⅸ下・Ⅹ層発掘の局部磨製石斧は、従来、旧石器時代に磨製技術の否存在説が一般的であっただけに、歴史の定説を書き換えるような新発見だといえる。また最近の石器の型式研究を更に発展させた形で、遺跡の構造論、分布論、そして生活活動の内容にまで言及する研究方向に対し、広範囲に調査した綿密な遺物分布の記録をそうした方向にもってゆくことが可能である点などをあげることができる。

3. 博物館学的発想と鈴木遺跡

a. 博物館学的発想とは

昭和25年に公布された博物館法第2条によれば、博物館とは

歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に一般の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関

であると規定する。

この法律を根拠に多くの研究者による博物館の内容的規範について論議がかわされてきたが、現在、大筋において意見の統一化がなされているようである。つまり博物館とは、構成上は「もの」「ひと」「ところ」から成り、

機能上は「資料収集」「整理保管」「調査・研究」「教育活動」から成立していると言えよう。

さらに加藤によれば^(註2)

博物館は現代社会にきわめて大きな教育的使命をもつもので、大衆に密着した博物館(そうした機能を盛りこんだ博物館)を設立しなければならない。

と言ひ、倉田においても^(註3)

この博物館活動を終極の目的と結びつけると広義の社会教育の機能を持つとい得よう。つまり社会により、社会のために、社会によって作られた博物館は、あくまでも人間社会に奉仕されねばならないだろう。と言われるとおり、両氏が博物館活動の目的を教育型思考にあてはめていることは注意すべきである。

そこで博物館学的発想とは、基本的に博物館の内容的規範にのっとりた思考法を言う。^(註5)そしてこれは今後人間が生存権を維持する上で、生活上の必要性を生かし、不必要性を除去し、将来に貢献させるものでなければならない、とまとめることができると思う。

b. 鈴木遺跡の構成論

鈴木遺跡の学術的価値については、先述したので理解できたと思う。ここでは、調査を構成する「もの」「ひと」「ところ」の内容を検討する。「もの」とは、形のあるもの(実物、模型等)と形のないもの(現象、記録等)を指し、「ひと」は、ものを収集、製作する調査員と情報をうける市民を言い、「ところ」というのはフィールド及び施設にあたる。

「もの」

形のあるものに、遺跡、遺物、遺構の実物、レプリカによる模型がある。約2万㎡の調査対象区から出土した遺物は膨大な量にのぼり、先土器時代の石器約3万点、礫約10万点をかぞえ、縄文時代は、早期から後期までの土器、石鍬や石斧等の石器もみられ、江戸・明治時代の染付陶器をはじめ日常雑器類、貨幣、鉄器等の遺物も数多く発見された。遺構は、先土

器時代の厨房場、石器製作場または動物解体場らしき痕跡を示す石器群集中箇所が100箇所以上、石蒸し料理に供したとおぼしき礫群が500箇所以上も出土した。これらのことから先土器時代人は移動狩猟採集民と言われながらもかなりの定住的生活を送っていたことは想像にかたくあるまい。それとは対照的に縄文時代になると長楕形状の土壇、所謂動物を獲得するのに使用したらしき落とし穴が2~3基を1つのグループをなして約10グループ程みつきり、野焼きに利用したらしき集石、堀り込みの底部に大形石を配した配石土壇等の遺構が少数あるだけで、住居址が存在しない。よって縄文時代の鈴木遺跡は、集落が営まれた定住生活というよりも狩猟採集場に利用された地域だったらしい。江戸時代には玉川上水から水路を引き込み、水車小屋遺構が設けられ幕府御用の焰硝火薬搗立所となり、明治時代には民間に払い下げられたらしい。

礫群の造形保有法は、その現状を保存する為に、シリコンで「め型」を作成し、これに石膏を流して復元する。従来、この種の復元によく用いられた方法は、礫群と下部の土塊をそのまま立方体形に切り取り、バインダー18(水溶性アルカリ樹脂)で凝固させたが、これは薬品が水溶性である為にカビが繁殖し、展示ケース内に設置しても水滴がたまり観覧に適さず、また土量が約1tにものぼり移動が困難である等が原因で今までにあまり実用化されなかった。ところが今回の造形保存は実物を供さずとも礫群の状態が実に鮮明に復元でき、軽量なので移動に便利だし、展示方法も自由な操作が可能という特色をもつ。

また土色、土質の変化を示す層位も復元した。ポリウレタンを主成分とした接着剤を直接土層に塗布し、更にガーゼで補強をした後、再び接着剤を施し上位から順序よく下位へ向けて巻き取るようにはがしてゆくと、厚さ2~3mm程の土が定着し、層位がそのままの状態で見出し出される。この方法のおかげで現地

表面から立川ローム層下部までの深さ約3mにわたる層位や、縄文時代の生活面から立川ローム層を掘り込んだ土壌の断面状態を復元した。

その他石器製作実験を施して多種類の石器見本をそろえた。これは当時の石器製作がどんな方法や手順によったかを推定し、先史時代人が文化的伝統の地盤を基礎にして仕上げた石器と比較検討することが目的である。その結果、同じ機能を果たす石器でも、現代人ならば手短かに合理的に処理する点を、先石器時代人は長時間かけて煩雑な手順を経て製作したのではないかという感想を抱いた。

一方、形のないものには、実測図、台帳、写真、映画、出版物等をあげることができる。これは実物資料を記録化する方法である。礫群・石器・炭化物片集中箇所出土状態や層位を記録した実測図や、また石器の形態を描く実測図も必要である。石器は時期ごとに器種や技術に特徴を有し、その形態を構成する諸属性の状態等を調べて記録化することは石器研究の基礎的作業の1つである。

台帳は、石器と礫に大別し、共に出土グリッド名、プロット値、石質、計測値の他、前者は器種名、後者は表面付着物の状態を記載する。

写真は静止的映像記録といわれ、35mmのカラーリバーサル、同モノクロームや6×6cm版のカラーリバーサル、同モノクローム、同カラープリントの5種類のフィルムを使用して、発掘調査状況、各種遺構、遺物の出土状況や時期、種類ごとに配列した遺物を撮影し、実測図、台帳の不足分を補うようになるべく多方面の写真を用意するよう務めている。

これに対し、映画は動的映像記録といえることができる。今までに調査開始初期の頃にその調査内容を紹介するのに調査団独自で製作した8mm記録映画と、その後、映画会社に委託して約10ヵ月間を費し「旧石器時代の狩人たち」という16mmの教育映画を製作した。後者は前

者に比べて教育的配慮が高く、鈴木遺跡の発掘調査を通じて、旧石器時代のひとびとはいったいどんな生活ぶりをしていたのか、日常道具の石器とはいかなるものかなどを一般の人達に興味と教養をもたせるように編集されている。最近、歴史関係の教育映画が流行しているとはいえ、先石器時代のそれには以前岩宿遺跡を題材にしたもの等のわずかをかぞえるしかなく、そこにみられる学説も現在はあまり通用しないことから、この「旧石器時代の狩人たち」は、今後とも我国の教育界に役立つことを内外ともに期待する。

さらに、こうした調査上の資料を一括整理してまとめたものが出版物である。出版物はあくまでも学術性に比重をおき、その要旨は調査の経緯、調査方法、出土遺物、遺構を図面や写真によって遺跡全体像を紹介することにある。ちなみに今までに刊行された出版物を掲げる。

1. 小平市鈴木遺跡調査会、1975、鈴木遺跡。
2. 小平市鈴木遺跡調査会、1976、鈴木遺跡。
都市計画道路第2・1・3号線内遺跡範囲確認調査報告書。
3. 小平市鈴木遺跡調査会、1976、鈴木遺跡、
遺跡範囲確認調査報告書。
4. 小平市鈴木遺跡調査会、1976、鈴木遺跡、
流域下水道建設工事にともなう緊急発掘調査報告書。
5. 加藤有次、小田静夫、戸田正勝、中津由紀子、金山喜昭、芳賀英一編、1976、鈴木遺跡と旧石器時代一掘り出された洪積世のこだいらー。
6. 小平市鈴木遺跡調査会、1976、鈴木遺跡、
流域下水道建設工事にともなう緊急発掘調査報告書(その2)。
7. 小平市鈴木遺跡調査会、1978、鈴木遺跡I、
都市計画道路小平2・1・3号線内。

以上7冊の他に、今後(1)と(2)が概報であったのを本報告として1冊にまとめ、現在継続中の発掘区の報告に(3)の概報分を含めた本報告2冊の計3冊を刊行する予定でいる。

「ひと」

鈴木遺跡の調査を構成する人員は、鈴木遺跡調査会に属し事務及び調査実務に直接携わる主体的立場者と遺跡見学者等のごとき情報をうける客体的立場者に大別することができる。

地元教育委員会は、地域内で埋蔵文化財の破壊されることを知ったならば、都道府県の各教育委員会へその旨を伝え、指導を得て工事施行主と事前協議を行い現状保存がやむをえないと判断されたら学識経験者に要請して遺跡調査会を組織することが行政調査の一般的手順である。鈴木遺跡はその所在地が小平市鈴木町1丁目地内にあることから、「鈴木遺跡調査会」とし、調査会は市文化財専門委員の加藤有次(現國學院大學教授)を団長とする調査団を発足させたが、この調査会や調査団の設立経緯や人員構成は全国各地の他例の場合とさほど変わるまい。

小平市鈴木遺跡調査会は、会長以下副会長、理事、監事、事務局長、事務員によって運営され、市、都の各種関係者が役職につき、調査団は顧問、団長、調査員からの学識経験者が実務をとり、考古学専攻学生等に補佐してもらいながら調査を進行している。

これに対し、遺跡を見学に来る人達には、遺跡を紹介したマスコミ報道等がきっかけで、市内や近郊から家族づれや子供の夏休みの宿題だとはいつて父親が同伴したり、考古学愛好家等がしばしば訪れる。遺跡の状況を日頃博物館や書籍でしか見たことがないその多くのひとびとは、調査員の説明で教養を修得するが、それにも増して驚きをもって見た何万年前もの人間生活跡が掘られている情景の印象は何よりの教育性がある。

小平市は昔から逃げ水の里と異名をとっていたごとく昔から人が住まない茫漠たる荒地だったと言われる。従来この地に初めて人が住みついたのは明暦2年(1656)に小川村の開発が先駆だとされてきたが、鈴木遺跡の発見がその上限年代をいっきに、約3万年前の

先土器時代までもさかのぼらせてしまった。当然この事実は市内の教育関係者の関心を引くことになり、小中学校の教員見学や小学生の課外学習として利用されることがしばしばある。ある市内小学校の校歌には歌詞に大昔の先祖の存在がおりこまれた例もあるほどである。筆者の少年時代には、発掘調査件数が現在よりも少く、埋蔵文化財を遺跡という舞台でしかに触れる体験がほとんどできなかった。だからこそ生涯で最も感受性が豊かで、発想力に富む小学生の頃に埋蔵文化財に対する体験学習を積み重ねておけば、将来に向けて徐々にでも理解や認識を深めることができよう。

鈴木遺跡が学術上極めて貴重な資料足りうることは再々述べてきたとおりである。そのため考古学や関連諸科学研究者の来跡も多数にのぼり、増々多大な成果を得るように内外共に援助をうけている。例えば、より適確な発掘法の検討・出土遺物・遺構の意見交換、調査上におこった新たな問題の解釈等についてである。とかく研究者は自己の分野を堅持し互いの意見交流をおこちりがちになるのが通念のようだが、各地で調査の担当又その関係者が、互いの調査を援助することは今後研究成果を高度化するのに必要欠くべからざる条件だと言える。

今日の我国大学教育上、考古学に関するカリキュラムは欧米諸国の例に比べて頗る不十分な内容しかない。大学側の教育制度の問題は別にしても、鈴木遺跡では、その調査を活用し、考古学専攻生が大学教育ではあまり教わらない実技面を重視した学習の場を設けるようにしている。都内の大学生ばかりでなく、夏期には長期休暇を利用し、山形大学、東北大学、京都大学等の地方大学や、今夏にはイギリスのケンブリッジ大学の学生までもが本遺跡の調査に興味をもってやってきたことがある。

一般に、遺跡調査は客体的立場者がなくとも主体的立場者だけで可能である。他者の介入をいっさい受けず、調査者の独自の考えで

調査し結果をだした例も他遺跡には多い。しかし、遺跡調査の目的は、埋蔵文化財の記録保存もさることながら、機会をのがしたら再度体験のできない実地を教育的配慮の下に公開することも一義ではないだろうか。文化財は研究者のエゴで左右に処理されるべきではなく、一般大衆に環元してこそ初めて価値が認められる。

「ところ」

遺跡は発掘調査の場にあたり現在までの発掘面積が約20,000㎡に及び、その範囲から各種の遺構、遺物を発掘及び実測した。先述のごとく見学者の案内や体験学習上、実地面での教育性が高い。

またこれに付属した施設がある。約740㎡の建設面積を有するプレハブ建築物の内部は、事務室、会議室、調査員室、整理作業室、収蔵庫に大きく間仕切りがなされている。事務室は市が事務局を担当している関係上、市役所の出先機関になっており工事原因者との折衝、予算案作成、予算収支等の調査における裏方的仕事の場となる。会議室は調査員相互の意見を疎通させるべく、調査進行過程の状況や問題点の解決等を話し合う調査員会議や研究会及び事務局と工事原因者との折衝等に利用される。調査員室とは調査員の詰所に相当し、調査予定の検討、調査に関係した情報の意見交換がなされる。また整理室では、直ちに出土遺物が運び込まれ、水洗作業、登録番号の記載、台帳作成、図面トレース、遺物実測図の作成、遺物接合作業等の基礎作業が全てなされる。そうして得られた情報資料は用意した図面庫に整理され、報告書の準備に供する。遺物はその後、収蔵庫に収納される。

以上述べてきた鈴木遺跡調査を構成する「もの」「ひと」「ところ」の各内容からその概略を理解していただいたと思う。博物館学的発想の考古学的調査の特徴の1つに、教育的観点の導入が介在する。レプリカ模型や記録映画は、通常の考古学調査には要求されない

unnecessary 「もの」だが、大衆の利用を考慮し、歴史教材の一環だと見做せば入用である。「ひと」においても当初の調査目的を果たすには、主体的立場者の存在だけで事足りるが、学問の必要性が大衆の環元にあるとすれば、客体的立場者の存在を無視することはできない。

従来の学術調査はなにも考古学だけに限らず、現地におもむいた調査者は地元人との間に一切の教育的接触もなく彼らをただの情報提供者だと見做しがちであった。しかし博物館学的発想にもとづく調査ならば、彼らを情報提供者と扱う以前に、なぜこうした情報が必要で、それをを用いた何々学はいったい実生活とどんな関係をもつか、という疑問に答えなければならない。学問は決して研究者の趣味物であってはならず、人間生活の将来的展望を導く指標でなければならない。したがって研究者は絶えず学問と大衆の間隔を機会あるごとに埋める努力が必要であろう。

c. 鈴木遺跡の機能論

これは活動状況とも換言でき、「資料収集」「整理保管」「調査・研究」「教育活動」の各内容を示す。これらは相互に機能し合い、循環機構を保たなければならない。

「資料収集」

その方法は主に発掘に依る。発掘にあたっては綿密精緻な記録法を採用し、資料の諸属性を最大限に摘出可能なことを念頭におく。

「整理保管」

資料の収蔵庫は空間を広くとることが第1条件である。出土遺物の増大につれて収蔵庫が狭隘になり遺物を野ざらしにすることがあってはならない。遺物には所謂優品、劣品を問わず全品を適切な保存に処してこそ保管本来の目的は達成されるのである。これには遺物を石器類と礫に分類し、研究者の要求に直ちに対処できるように、発掘年度、調査グリッドや登録番号を明記したプレートを各整理箱に明記してある。考古学資料収蔵には、材質に応じ

た条件を考慮しなければならない。本遺跡の資料は石製品が主体なので、重量と建設物の耐久に注意を払ったが、他に土器や木製品、金属製品を出土する遺跡の場合には、温度、湿度、採光、空調、塵等の問題にも十分検討し、遺物保管の場が破壊の場に陥らぬよう注意しなければならない。

「調査・研究」

資料の価値観には絶対価値と創造価値の2種類がある^(註2)。鈴木遺跡の出土遺物はいずれも骨董的、美術的な見栄えのする品物はただの1点もなく、素人ならば単なる石にしか判別できない「もの」ばかりである。しかしそれは確実に人間の生活道具である由、歴史的意義が内包しているものにほかならない。今日美術館はもとより博物館までも絶対価値をシンボライズしている例が少なくない状況にとって、先土器時代遺物の調査・研究は創造価値をつくり上げる絶好の機会といえる。その為にはあらゆる方面の関連諸科学も援助する必要にかられる。

そこで、ちなみに一昨年度の研究テーマを報告書から抜粋する。

- 鈴木遺跡Ⅳ層出土石器群についての一考察 (松村明子)
- 鈴木遺跡Ⅵ層出土石器群についての一考察 (織笠 昭)
- 鈴木遺跡下層出土石器群についての一考察 (戸田正勝・松井政信)
- 鈴木遺跡Ⅵ層出土石器の顕微鏡観察 (実川 順一)
- 鈴木遺跡の礫群の研究 (金山喜昭・溝口優司・小田静夫・赤沢 威)
- 鈴木遺跡出土の礫群及び石器の岩石学的研究 (橋本光男・斎藤靖二・千葉とき子)
- 花粉分析 (徳永重元)
- 粘土鉱物分析 (加藤好武)
- 一次鉱物分析 (加藤好武)
- イモ石分析 (加藤好武)
- 鈴木遺跡の腐植の¹⁴C年代測定 (山田 裕)

更に今回刊行を予定している報告書中には、考古学的考察の他に自然科学方面では、自然環境復元に供するため木炭片の樹種同定や、年代測定や原産地推定に黒曜石によるフィッシュトラック、ハイドレーション法が追加されることになっている。

この調査・研究は遺跡調査の要とも言える分野に属し、全国大概の遺跡調査は発掘の経過報告に終始しがちな傾向に対し、本遺跡調査ではできる限りその因習を是正し調査報告と研究報告を両立させるべく努力している。資料紹介は詳細を極め他研究者が研究報告を検討できるように配慮したつもりである。

「教育活動」

これについては多少先述したので再言しないが、ただ遺跡展覧会についてとりあげてみる。昭和51年11月24～27日の4日間にわたり、小平市福祉会館市民ホールにて、主催小平市文化協会・小平市教育委員会、主管小平郷土研究会・小平市鈴木遺跡調査会、協力鈴木遺跡調査団のもとに『鈴木遺跡と講演のつどい』と題する展覧会を開催した。発掘調査開始からそれまでの出土遺物や調査・研究成果を中心に先土器時代の文化史像をなるべく平易に説明するため、写真、図表、絵画、模型、複製動物等を用いた企画展示を実施した。同時に映写会「多摩の古代遺跡」「石の文化」「鈴木遺跡」の三本を上映したり、講演会に樋口清之氏「東京の歴史と文化」、加藤有次氏「小平市鈴木遺跡の概要」、芹沢長介氏「日本の旧石器時代」が催されたこともあり、期間中に訪れた市内、近郊からの入場者数は約2千名にも及び盛況をはくした。市民の中からは「小平にこんな大昔の遺跡があるとは知らなかった」「なんとか史跡に保存することはできないものか」、「うちの近くの場所にもこんな遺跡があるのではないか」という感想を得ることができた。あるいは「どんな方法で遺跡を発見するのか」、「石器には多様な使われ方のあることを初めて知った」、「当時の人間

はどんな生活を営んでいたのか」等、考古学の学問的な理解に興味をもつにいたった市民も多くいた。ともかく市民にとって展覧会は、歴史を日常生活のなかに導入し、合わせて小平の郷土を理解する精神をもつ動機づけになったといえよう。

展覧会を開催するにも、遺跡調査の間隔をぬい、予算も少ない状況で辛苦して挙行したのだが、思えば市民に予想外の反響があったこと、行政当局側にも多少とも埋蔵文化財の意義や価値を理解してもらうことができたことは主体的立場者の行為が評価された結果だろうか。

4. 行政調査に対する警告

今日、考古学調査には、大別して学術的目的のための調査と、開発にともなう土木工事の事前の調査の2種類がある。過去における両者の件数を比較すると「昭和34年度に学術調査227件に対し土木工事に伴う調査が118件で、2:1であったのに対し、40年度は192対432件で、1:2.25と逆転している。これは単に件数の増加だけでなく発掘規模の拡大を伴っている^(註6)」。そして昭和50年には実に学術調査が69件に対し、行政調査が2,698件で、1:39の比率まで格差がひろがった^(註7)。

その背景は、都市化の進行に伴う公共事業として、住宅、上下水道、清掃工場、道路、公園、学校等や地方での園場整備等を掲げるまでもなく、民間でも住宅建築、鉄道付設等を含め、公共、民間を問わず実施される盛んな開発行為があるからである。行政調査は、その多くの遺跡が予算や期間、また人材的な制約による不完全な調査体制下で実施されるため、学術調査とは質的な違いを有し、記録保存という大義名分を引き合いに出し、しばしば破壊行為に近い形態をとる例さえ見られる。昭和50年の行政発掘件数が示すごとく、膨大な遺跡数にのぼる理由は、調査の学術性よりも調査件数、つまり「質より量」を優先したから

で、学問としての考古学の名を汚す由由しき問題と言える。学問とは、その成果を社会に裨益・還元する使命があるのに、あたかも行政体の手足であるかのような手段行為をなすのは学問の意義をはきちがえた真に本末転倒の現象だろう。ここで、ひとつ考古学の学的位置を名誉挽回し、一部の他分野研究者から「考古学は学問とは言えない」という悪口を是正することはできまいか。もしもこうした現状が今後も進行するならば、歴史的伝統遺産たる埋蔵文化財は近い将来必ずや灰塵に等しい状態になろう。歴史の伝道者たる現代人の立場として、後世に文化の実像を引き継ぐ義務から、また現在我々が生存する社会環境、自然環境を開発事業による破壊から守る為にも、埋蔵文化財の保護に対する適切な処置が必要である。

そこで、第1の原則は遺跡の現状保存である。しかし行政、社会、産業等諸般の事情によって、それがどうしても不可能な際は、十分な事前協議を経た後、調査されなければならない。

調査の基本条件は、まず第1に、調査する学術的根拠を正し、それに用する手段である人材、費用、期間を充実し、報告書の刊行と出土資料の保管場所の確認をすることである。この条件にそぐわぬ調査は遺跡の破壊行為の何物でもなく、現在これに当該する多数の行政調査は即刻に認識を改め、適切な調査体制に改善すべきである。

註1) 第II a期には角錐状石器が組成に含まれるが、第II b期にはかわって尖頭器が出現する。

註2) 加藤有次, 1977『博物館学序論』雄山閣出版

註3) 倉田公裕, 1979『博物館学』東京堂出版

註4) 小平市教育委員会, 1967『郷土こいだいら』

註5) 小平市鈴木遺跡調査会, 1978『鈴木遺跡I』

註6) 坪井清足, 1966『埋蔵文化財の発掘と保存』考古学ジャーナル, 1

註7) 日本考古学協会, 1977『日本考古学年報25』

『(1975年版)』

付記

鈴木遺跡の調査は、行政調査の性格上、かかえる問題点も決して少なくない。しかし幸い当初から関係各機関の理解のおかげをもち、調査の基本的条件をほぼ充たすことができ、加えて教育的観点からもアプローチの眼を向けることができた。本稿は、決して鈴木遺跡の調査を正当化すべく述べたのではなく、それはい

くつかの支障を伴いながらも、今後考古学調査の将来的一展望をとりあげたにすぎない。

また、本稿を書くにあたって鈴木遺跡調査団団長の加藤有次教授をはじめ調査員及びその他の関係諸氏からは、資料の提供及び助言をいただいたことをここに感謝し本稿の結びとしたい。

(1) 1979年12月15日受付

(2) 本学文学部助手



写真1, 鈴木遺跡の調査風景



写真2, 収蔵庫



写真3, 映画「旧石器時代の狩人たち」撮影風景



写真4, 遺跡説明会



写真5, 礫群の造形保存



写真6, 展覧会「鈴木遺跡と講演のつどい」

(1)

田中芳男と神宮農業館

History of "The Ise Jingu Agricultural Museum" (2)

矢野 憲一

Ken'ichi Yano

1. はじめに
2. 農業館ができるまで
3. 田中芳男の仕事
4. 農業館の方針
5. 物産学者のコレクション
6. 晩年の田中芳男爵
7. おわりに

"The Ise Jingu Agricultural Museum" is located in Ise City, Mie Prefecture, in western Japan. Its exhibits emphasize agricultural, marine and forestry products. At the time it was founded by Yoshio Tanaka nearly 100 years ago, the idea of a museum was as a place to promote the development of industry, in contrast to the modern concept of a museum as a means of public education. Yoshio Tanaka's interest in establishing the museum stemmed from his position in the government. Nevertheless, he proved to be a highly skilled and innovative curator, a fact that is readily apparent in the way he classified and analyzed the materials in the collection, and set up the displays. The present essay discusses the founding of the museum and the activities of Baron Tanaka.

1. はじめに

伊勢の神宮では公益事業の一つとして神宮徴古館と農業館を経営している。

神宮徴古館は神宮の由緒並びに日本文化の変遷を徴する資料を、農業館は農業、水産、林産等に関する資料を陳列保存して一般の観覧に供するほか産業の振興発展に資する施設を行い、文化の向上を図るを目的としている。

両館は伊勢市倉田山の23,100坪(763.45a)の敷地内に道を隔てた隣にあり、人文と自然科学系と性格を異にしているが、正式には神宮徴古館農業館とよび一体である。いずれも明治中期の創立で、わが国の博物館としては早い時期に開設されたから、近代博物館創業史のうえからも興味がふかい。

ここでは特に農業館の創立と、それに関係した田中芳男の業績をみてみようと思う。

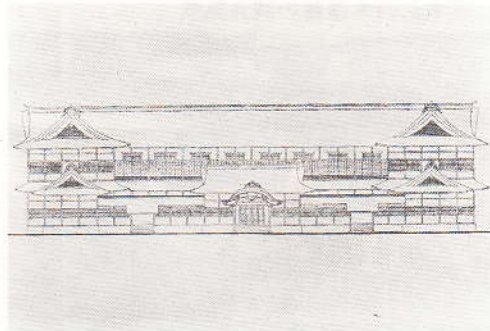


写真1. 明治24年の農業館（外宮前）



写真2. (右) 現在の神宮農業館

2. 農業館ができるまで

神宮徴古館農業館は、財団法人「神苑会」により設立されて神宮に献納されたものであり、まず神苑会の沿革を略記する。

中世以降、神宮の宮域に民家が接近し聖域をけがし、火災の恐れのあるのを慨歎し宮域の肅清を復しようとして太田小三郎^(註1)が首唱し同志と相謀り、明治19年6月この会を創立し、のち事業を拡充進展させ有栖川宮熾仁親王殿下を総裁に仰ぎ、国家的大規模な運動のもとに内宮外宮の神苑を開設し尊厳を維持させるとともに、倉田山の土地を買収し農業館と徴古館^(註2)を建設して明治44年献納することにより目的をはたし解散した。

この会が早くから博物館建設を企画していたことは、明治20年の事業報告にみられ、第1事業が両宮神苑の開設、第2予定事業に歴史博物館の建設をうたっている。

歴史博物館の規模は宏大で調査に日時を要するから今から準備をしておこうと、明治20年秋、帝国博物館勤務の福地復一に取調を依頼した。

明治21年春に出された倉田山計画見積順序乙編には、歴史博物館ヲ設クル事、古俗園、書籍館、油画廊、動物園ヲ設クル事などのほか歴史博物館附属農工博物館ヲ設クル事と見え「現時農工上ニ必要ナル器具ハ、内外ヲ論ゼズ、種類区域ヲ設ケテ網羅排列スルノ区トシ、一般観者ヲシテ将来ニ応用發明スル所アラシメントス」とある。この計画にもとづき大岩芳逸^(註3)を東京に派遣し福地と共に調査に従事させた。

明治21年2月の神苑計画案には歴史博物館陳列要目の内、第3室第1区に「農業(農作・種樹・漁獵・牧畜・養虫類)」とみえ他に植物園・動物園・彰徳館等も附属館に計画していた。

かくして農業館は歴史総合博物館の中に入れて企画されていたが、第1次恐慌が起り日清戦争をひかえ寄附金が思うにまかせず財政



写真3. 田中芳男

困難となりやむなく規模を縮小せざるを得なくなった。

明治23年7月徴古館の一部として勸農館建設の議が出たが未だ機は熟さなかった。

この年11月、神苑会会頭吉井友実伯爵の推選により貴族院議員従四位勲三等田中芳男に意見を徴し、農業館設立とその経営を依託した。ここに田中芳男が「蓋適任其人ヲ得ル者ナリ^(註4)」として登場してくるのである。

3. 田中芳男の仕事

田中芳男はわが国の博物館事業の生みの親の1人であるが、伝記らしいものがでていない。大正2年5月に大日本山林会が主催し、大日本農会、大日本水産会が協賛して76才の記念展覧会を催したとき、大日本山林会編纂「田中芳男君七六展覧会記念誌」なるものがでており、その中に「田中芳男君の経歴談」と題する自伝の講演が記録されている。

これが一番くわしく、いろいろな書に再録^(註5)されている。

このほか大正3年に田中芳男の親族及知友に頒ち功績を後世に遺さんと小泉三男松が編纂した「田中芳男氏功績書」がある。神宮農業館には未整理の手記等所有するので、これらをあわせいずれくわしい年譜を作成したい

と思うが、今回は功績の一端をかいまみると。
○天保9年8月9日長野県下伊那郡飯田町に生まれる。父は医者。

(註6)

○安政4年20才の時、尾張藩医伊藤圭介の門に入る。

○文久2年5月幕府の蕃書調所に出役する。

文久2年～3年チューリップなど舶来の植物60余種を栽培し温室をはじめて建設する。

○文久3年 緒方洪庵より九段坂上の薬草園の管理と栽培を委嘱される。同年、小塚原にて馬を解剖、化学も学び元素の名を知る。

○慶応元年 はじめて白菜を栽培し、亜麻から織布をとる。舶来植物に菊芋の名をつける。

増補英和対訳辞書の物名語彙を編成。

○慶応2年 リンゴの接木を創始する。仏国の万国博に出品する昆虫採集をする。

○慶応3年2月 パリの万博に幕府より出張を命ぜられる。帰国の際、ホロホロ鳥、サボテンなど多数の珍品を携へて開成所で展覧会を開く。

○明治元年 開成所御用掛となり大阪の舎密局を建設する。万博にて取得した技術で金鯛を剥製。これが日本で魚を剥製にした嚙矢である。

宮内省より米国の動物図書に訳名をつける囑託をうける。

○明治3年3月大学出仕となり、物産局新築の設計をする。

○明治4年5月 九段坂上に於て物産会なる名称で博覧会を開き天覧を仰ぐ。これは日本の博覧会の起源である。殖産興業の発展を計るには博覧会が必要と首唱したので、博覧会の創始者といわれる。

○同年8月 湯島聖堂に博物館を設ける。博物館という名をつけたのは田中芳男といわれる。

○明治6年 ウィーン万国博に一級事務官として出張、出品物の蒐集、荷造の事務まで従事する。このとき彼地の博物館、美術館、各種工場を視察し技術を伝習し新知識を輸入す

る。石膏型の技術もこのとき会得する。

○明治7年 内山下町の博物館でウィーン博より持ち帰りたるものの展覧会を開く。のち「澳国博覧会参同記要」を編輯。

○明治8年 上野公園に動物園と博物館設立の準備を担当する。

○明治9年 フィラデルフィア独立百年博に出張、彼地でも大いに知見を得、帰国後、鮭鱒人工孵卵の開源をなす。人造石（コンクリート）にて自邸の玄関と井戸側を試験的に築造し、のち25年自邸をこれにて建築する。コンクリート建築の創始なり。上野公園で、明治9年10月、羽後産の土瀝青（アスファルト）の使用を試みる。

○明治10年 第1回内国勸業博覧会をはじめ明治36年の大阪第5回内博まで毎回審査部長、事務官、評議員などで参与する。陳列館の建設から出品物の説明書の文章、製品には原料を添えて製造順序を示す指導など細微の点まで用意周到なのは驚くべきものがあったという。

○明治16年 第1回水産博覧会、30年第2回水産博覧会の開設に尽力し、審査部長などする。

○明治18年 東京学士会院（のち帝国学士院と改まる）会員となり、学術講演37回をなす。

大日本農会を創立し、大日本水産会、大日本山林会に關与し、コルクの栽培、尾長鶏を世に知らせ、大日本農書、水産名彙、日本物産年表など多数を編纂。日向高千穂に天然稻(註7)の探求。田中ビワという新種枇杷を出すなど驚くべき活躍をした。

この活動ぶりを見ると精力絶倫の人を思いうかべるが、奥一著「田中芳男のサボテン研究」の中に「父芳男を語る」という田中五一の手紙の転載があり、それには「努力一点張りて体は小さくやせていました。共に入浴して父の脚は細く、膝頭ばかり大きく云々」とある。明治人の気魄が仕事をしたのである。

4. 農業館の方針

神苑会会頭吉井伯が田中芳男に農業館建設の一切を依頼したのは、文部省に出仕し町田久成とともに博物館事業の創設に功があり、内国勸業博の審査部長や農商務省御用掛兼勸農書編纂掛長及び博物局長をつとめた多くの功績によってであった。

明治23年12月3日、神苑会は外宮前に農業館建設を決議し開設旨趣を發表した。

農業館開設ヲ要スル旨趣（全文）

「徴古館開置ノ目的ハ、本会規則第2条ニ掲載スル所ニシテ、早晚着手ヲ要スルモノナルモ、其規模頗ル大ニシテ範圍モ亦広ケレバ、一朝ニシテ完成ヲ期スベキニアラズ。抑本邦ノ国ヲ立ル、農ヲ以テ本トシ、而シテ農事ノ本邦ニ於ル、実ニ皇祖大神ノ恩頼ニ依ルモノナルハ歴然トシテ史伝ニ徴スベキ所ナリ。我國民、神宮ヲ以テ農事ノ祖ト奉仰シ、農家ノ子弟必ズ一タビ神宮ニ賽スルヲ期シ、頒曆授時ノ事必ズ神宮ニ需ツガ如キ、古來ノ習俗洵ニ以アル哉。依テ按フニ、本会徴古館中、先第一着ニ農業館ヲ設置シ、普ク海内新古百般ノ農業具ヲ蒐集陳列シ、傍ラ標本及農業書ヲ收藏シテ農業家ノ觀覽ニ資シ、尚種苗交換所ヲ置キ四方ヨリ集合スル參宮者ニ、多少ノ種苗ヲ携來交換シテ蕃殖ノ道ヲ講ゼンコトヲ奨励シ。又漸ヲ以テ海外諸國ノ農業具及農業書ヲ購入臚列シ、以テ參考ニ供センニハ、目下本邦ノ農事ニ向テ裨益ヲ与フルモノ、決シテ少小ナラザルベシ。是即チ百聞一見ニ若カザルノ勝利ヲ收得シテ、其実業ニ便益ヲ与ヘ、益々神德ヲ無窮ニ尊崇センコトヲ欲スルノ旨趣ナリ。」

当初の計画は農業の歴史を主としたものであったが、田中芳男は自家の所見をのべ、その設備構成等すべて自己の理想を実現すべき条件でもって、勸業館の性格を強く主張し翌24年1月伊勢に出向した。

ただちに田中建設委員長は建設地を踏査、外宮前（豊川町）に選定し、当初考えられて

いた農林館の名を農業館とし、水産も合せることに決定した。建設は急速に進められ4月20日工事落成、5月1日から7日まで大日本農会主催の農産物品評会を開き、翌8日開館式を行った。

陳列品がまだ完備しないので開館に先立ち品評会をし、出品者から寄贈をうけようというアイデアも田中芳男であった。

開館式には田中芳男が神苑会幹事として總裁熾仁親王の御名代で「農業館ヲ設クルハ國產ノ富饒ヲ企図スルニ在リ」と令旨を下した。この時農業館旨趣を發表した。

館の敷地は2,025坪、建坪103坪の木造瓦葺平家建。展示資料は前年の第3回内国勸業博で購入した農具74点をはじめ寄贈の統計表図書250種、それに品評会出品の寄贈農産物数百種が主であった。夜は農業の幻燈会を開いている。

はじめ歴史博物館の一部として企画したときは、古代農具より各時代の農業の沿革を示す意図であり、正倉院御物の模型の子日の鋤や玉帚など作っているが、時代は新国家建設のための富国強兵、殖産興業政策の推進機関としての勸業博物館を求めているし、田中芳男の理念も国家産業の振興が第一で、「國產ノ豊饒ヲ企図シ………学理ト實際トヲ併セ一見通曉シ易キヲ旨トシ人智ヲ裨補セントスル」と述べている。

以来、田中芳男は全精神を農業館に傾注している。幼なくして親から「人たる者は世の中に生れ出たからには自分相応な仕事をして世用を濟さなければならぬと教えられた」（経歴談）というが「素志を達する好機会なるをもって蒐集整備に全力を注ぎ、掛図を製し、農業各般の業務に付ては絵図によりて実相を示し何人も一覽了解することを得るの便に供し或は統計図表を作りて生産の盛衰を一日瞭然たらしめ、其品物の採集を為すや到る所に搜索、探査、徴を拾ひ片を蒐む其の苦心、丹精、想像の外にあり殊に陳列方は極めて秩序

的にして一見了解し且つ応用を知り易からしむ、例へば製造品の如き其原料、製品より容器に至るまで秩序よく整列し、また列品附札の如き和名を附し傍訓を施し且一々解説を添へしが如き是なり」(田中芳男氏功績書)と、ほとんど十年一日の如く陳列事務に励精した。

この蒐集資料を分類編纂した「農業館列品目録」が明治33年3月神苑会から出ている。^(註9)総品1万1千余点を24類にわけ780頁の大冊子で田中芳男苦心の編纂である。

田中芳男は神苑会幹事と農業館主管を委嘱されていたが、明治36年1月、神苑会は財団法人となり、同会理事と同館監督を囑託された。

徴古館建設と農業館の倉田山へ移転は早くから考慮されていたが、日清戦争以後民間金融は緊迫し募金の実が上らず、とりあえず農業館のみ明治37年移転と増築が決議され、38年倉田山に竣工し、田中理事の監督で陳列に着手、同年7月30日開館式を挙行了。現在の建物である。

この日、田中理事は、創業当初は歴史博物館の一部とした計画を変遷したが、過去15年間、殖産興業の精神を一定の方針として進めてきたことを強調し願末を報告した。

田中芳男は貴族院議員として、また農林水産諸会の役員として仕事は煩雑で、東京に邸宅あり丹後に別邸ありで多忙の中、つとめて伊勢に在って農業館附属の一室に滞留し専心整理に従事し、創設以来すべての資料整理を担当して、専門の技術と博識とでもって陳列の次序を正し標記の当否を検し、手にかけない列品はなかったという。

5. 物産学者のコレクション

田中芳男のコレクションをみると、学者の研究する態度やアマチュアが研究する態度とは著しく異なり、一貫して殖産興業に資すべきものを利用厚生媒体として蒐集している。

明治44年12月に出版した「農業館列品目録

^(註10)第2版」から、田中芳男が寄贈した蒐集資料を無造作に拾ってみると。

竹米4種(粉碎シ食用ス) 桃椰毛(綱索ヲ造ル) 夕顔(生鮮ナルハ食シ乾瓢ヲ製シ老熟セルモノハ種ヲ採リタル跡、花活又ハ種子類ヲ貯フルニ用ウ) イカの骨(石灰質ニシテ粉末トナシ歯ミガキ粉ニ製シ又ハ血止トシ若クハ彫刻ノ料トナス) 海藤花(タコノ子ヲ乾カシタモノ湯ニ浸シ食ス) 蛤粉(粉末トナシテ顔料ニ供ス) ボラの鱗(かんざし等装飾品ヲ作ル又煮テ膠ヲ製ス) 熊の掌(支那料理ニ貴重) カズノコ搾粕(ニシンノ産卵期ニ於テカズノコノ海岸ニ漂着シタルヲ集メ製シタ肥料) 燐礦(人造肥料原料) エスパルト(西洋舶来デ紙原料トナルガ雨ヲ厭フルニ栽培ニ難シ) オリブ樹(オリブ油ハ油漬鱈魚罐詰ノ必需品、田中芳男夙ニ是ニ着眼シ海外ヨリ苗ヲ輸入シ各地ニ頒チタルモ好成績ヲアゲヌハ遺憾ノ事ト云フベシ、材ハ彫刻料ニ供シ小器具ヲ製スルニ適ス) イタチ捕具、牛蹄製釦、赤松製セメント樽側材、各種鶏卵殻、有害蔓草標本等々2千2百余点を寄贈している。

子息田中五一の「父芳男を語る」の中にも本郷金助町72の元大塚工芸社のある所の家の庭にはビワ、ナシ、カキ、スモモやウメばかりで観賞用の庭木は1本もなく襖の画は水藻類をそのままとって木版で刷ったもの、書画骨董はきらい。碁将棋には全く無関係、平素は早寝であるが牧野先生が来られると夜の更けるまで若いこの植物学者と語っていた、と徹底した研究生生活ぶりがうかがわれる。

田中芳男が主になり神苑会で購入した品々を見ても「我国ノ需用ヲ充テ或ハ将来利用ノ望アル物品ヲ蒐集ス」という特色がよくみられるが、一例を鯨のコレクションでみてみよう。

神宮農業館はサメの剥製が多いことで有名であるが、ほとんど田中芳男の斡旋で購入や寄贈をうけたものである。日本近海には約80種のサメがいるが内64種83びきを蒐集し現在

もその一部を展示している。

蒐集の目的は、サメは古来から恐ろしい魚として漁師にきらわれ、また神の使いだという伝説が各地にあり、捕ることを敬遠されていた。皮が刀の飾りやサンドペーパーの用にされたのみで、肉も一般的には独特のくさみのため下賤の食物とされ利用価値は少なかった。

ところが明治中期、サメのヒレが高級中国料理の材料として輸出が盛んになり、油も利用されるようになった。そこで迷信打破と啓蒙のためにコレクトされたのである。「農業館列品目録第2版」の解説中には「他ノ魚族ヲ食スルノミナラズ時ニハ人ヲ害スルコト有ルヲ以テ益之ガ捕獲ニ勉ムベキナリ」ともある。

64種83尾中、17尾は明治30年神戸市で開催された第2回水産博に出品したものを購入している。田中芳男はこの審査官をしている。あとは伊勢湾産で伊勢河崎町の吉田柳松が剥製したもの11尾、残りは田中芳男が小田原の魚商にたのみ蒐集し、東京で剥製にしたものが大部分である。

剥製にすると色彩と形がどうしても変るため直に写生させている。この絵を根拠として明治31年「日本産鯨一覧図額」が水産伝習所卒業生津川西彦編で出版された。

ここで思い出すのは、明治11年大蔵書記官宍戸昌が、大阪の堀田竜之助なるものが魚を入手するごとに写生図をつくっていることを聞き、前年入手した紀藩源伴存著「水族志」を持ち尋ねたところ、これは師の畔田伴存（号翠山、通称十兵衛）の遺稿であるとわかった。のち田中芳男が宍戸昌を訪ね、この「水族志」をみて歎賞し、印刷出版を宍戸にすすめた話である。

明治17年「水族志」は河原田盛美に校正させ田中芳男が校閲し世に出た。元老院議官に勅任された多忙の中で、故人の著書を出す面倒な尽力を取って引き受けたのである。

サメを直ちに写生させ、剥製後の修整と一

覧図をつくるのに役立てたのは、翠山の書物及び堀田竜之助^(註12)に教示されるところがあったのであろう。

農業館のサメのコレクションで感心させられるのは、各種サメの卵から骨、歯、皮、ヒレ、明骨、サメのタレ（伊勢地方の特産品）サメスガ（宮城県特産）サメ皮製煙草入（是ハ維新後廢刀令出テ柄鮫鞘鮫ノ需用ヲ減スルニ至リシヲ以テ他方面ニ応用ヲ案出セシモノ）など製品及びサメの釣鉤、釣糸などまで集めていることである。

特に皮とヒレとは実に詳細な解説をほどこし、利用法を示している。

ヒレを拓本にとった「鰻鱈膳写図」が何枚もあるが、品種による特色、重量、品位、代金まで明記し、物産学者として産業開発にすべてをかけた姿勢がうかがわれる。

剥製魚類の展示方法も、実現はしなかったが、ケースに青い布を張り、中にコンブなど海草を配して海中の気分を出すことを考えているのはさすがである。

明治27年に製作した「大磯魚藻一斑の額」はこの装置をした額面と「記念誌」にある。

田中芳男の標本・拓本製作方法与展示技術についていずれまあとめてみたいが、「伊勢の農業館での新設備」^(註13)として記録したものに、

○陳列の木竹草と対照して園内に実物を栽培す、この肥料の刈草に石灰を加へて急速醗酵させて良好な成績を得たこと（現神宮農業館の樹木園である）。

○園芸促成床を設置したこと。

○庭に西洋舶来クロウバを移植したこと。

○館内に菜果類の生物陳列をしたこと。これは空気の流通する戸棚を新造し、冬期なら数週間保つことが出来、来観者の注意を惹くこととし、蔬菜33点、果物42点を生のまま陳列し順次交換する。

○英国製軽便電話（メタホン）を装置したこと。これは室内用だが他日、事務所との連絡に竹管を電線に被らしたら架設も可なり。

○農産農具も改良発達を促すべきものを主として陳列す。

などとある。近代博物館創立期の苦心と仕事ぶりがよくうかがえる。

6. 晩年の田中芳男男爵

明治42年9月、徴古館も開館し、農業館とともに44年に神宮へ献納された。

田中芳男は大正元年12月にも晩年の大事業であり、自身が計画設計し展示まで全面的に委嘱された神宮農業館に出向していた。

正月は貴族院議員として宮中の新年式に参加するのが常だったが、諒闇中で新年式がないので正月も農業館の仕事をしていた。この頃を知る人の話では、「先生は気むづかしい方で、寒い事務所の一室にとじこもり筆まめに記録をされていた」と語る。1月21日風邪をこじらせたのか病気のため帰京し、そのまま引きこもった。

周囲の人々は心配し翌年の喜寿の祝を待たずに展覧会を行うことを計画した。これが「七六展」である。開会の趣旨を「同君は華美なる祝宴などは好ませられず殊には御諒闇中の事にもあれば同君に於て年来選作採集相成居候図書標品の中、自家の関歴に關係あるものを陳列し万事質素を旨として展覧会を設ける」と各種資料、著書から石ころ、マッチの類まで蒐集品を陳列した。

「私は近年非常に老衰しまして、寒さに当りますと身体の屈伸が出来かねます様なので、最早来年まで無事で居るや否や分らぬのであります。ところが幸に諸君の御配慮に依って今年此所で展覧会を催したことは誠に有難いこと」と「経歴談」で述べている。また「殖産興業の精神から成立って博覧会をやり博物館を開くということに従事した故にとうとう私の一生涯は博覧会とか博物館とかいうような品物を人に見せるということの方に精神を注いだ」と述べる田中芳男にとって、最後の自分自身の展覧会は、大正2年5月4日より

13日まで（8日までの予定が希望者多いため延期）来館者2,514名の盛会であった。これに満足し、また元気をとりもどし、6月には農業館を訪れているし、8月には北海道へ旅行している。大日本山林会と材木業大会のためである。

田中五一によれば「父は一年の大半は旅行でしたが、温泉に行くのは有馬温泉だけでした」という。遊覧旅行でなく仕事のためである。11月には再び、農業館に出向いた。これが最後の伊勢への出張であった。

大正3年正月は大晦日に突然咯血したのを侵して宮中の新年式に臨み、帰って臥床した。1ヶ月安静したが2月12日台湾出張を命ぜられ神戸から備後丸に乗船した。無理がたたったのか途中ひどい流行性感冒にかかり門司で下船、医者2名付き切りで3月1日帰京した。重態であった。気力というか根性というか再び回復、大正4年9月28日朝鮮行を決行、10月5日元山、6日開城、9日京城へ行っている。何の仕事であったかまだ調べてないが、日本の産業開発のためであったことはまちがいない。帰途別府温泉に入り同21日帰京している。

大正3年6月正三位に叙せられ、4年12月に産業界に貢献大なりとして異例の男爵を授けられた。

大正5年6月14日神経痛発病、胃潰瘍を併発し同21日死去、79才。特旨を以て従二位に叙せられた。

田中芳男の物産学者としての生涯を一覧すれば一冊の書物となりうるほどであり、著作も多いが稿本のままで上梓されていないものが多い。「記念誌」と「サボテン研究」に著書や編纂書の概要がうかがえるが、農業館には田中芳男が編纂や校閲した掛図類が140余点ある。

その一部を記すと、

稲花図解・米作ト気候ノ関係・飯ノ炊キ方・米穀反別及収穫一覧・六十年間東京米相場

・米粟試作成蹟一覧・琉球種大冬瓜図・椎茸製法図解・世界諸国沙糖産額見積表・陸地綿栽培心得・綿類需用高表・菜種作附反別收穫石高比例一覧・漆図解・杉丸太図解・孟宗竹栽培図解・樟腦製法図解・薪炭図解・肥料分析表・毒便覧・螟虫ノ図解・毒菌ノ図解・西洋良種ノ馬牛・全国馬牛頭数表・羊ノ効用・家禽図解・養蜂図解・養蚕図解・蚕絲輸出比例一覧・日本重要動植物図解・乾鮑製法図解・浅草海苔図解・水産物輸出一覧・幼稚ナル水族捕獲ノ害・養鯉法図解・農家必要農事一覧・人民之常食・救荒野菜図説・各国農産額一覧・勸業博覧会及共進会統計など。

神宮文庫に「神苑会印刷帖」2冊がある。これは明治20年より37年までの神苑会諸印刷物を田中芳男が蒐集して丹念に貼りこんだもので、屑籠にすてられるような印刷物のすべてが整理され興味ぶかいものである。

農業館に「摺拾外帖」1冊と無名の帖2冊が残されているが、これは大正3年8月頃に日常生活で得た広告・商標（菓子・農具・果物）案内状・代金請取証・名刺・手紙などありとあらゆる用済みの印刷物が貼りこまれている。東京大学図書館の田中文庫にはこの「摺拾帖」96冊があり、安政6年から大正5年にいたる雑多な風俗資料が貼りこまれているという。記録を残す意欲が人一倍強かったことがよくわかる。

7. おわりに

昨年、神宮農業館は創立88年を迎えた。「富国興産」をめざす時代はすでに過去のものとなり、最初の出発点に帰り、再び農林水産の歴史博物館としての目標を持たざるを得なくなったが、田中芳男の手になる系統だった展示がすっかり崩れたのが残念である。しかし現在収蔵資料1万余点の内、戦後大阪の浜寺公園の財団法人富民協会経営の農業博物館より引継いだ2千9百余点のほかは、すべて田中芳男の苦心の蒐集品である。

90年の歳月は展示物も施設も時代のずれを生じたが、訪れる人は「日本らしいものを見せてもらった」と云う。

日本再発見が唱えられる現今、近代博物館創設期の姿を一番よくとどめている自然博物館として、見なおされる日が近いと思う。

いずれにせよ、明治の気宇は大きかった。

註1) 太田小三郎(1846—1916)伊勢古市の人、神苑会幹事、徴古館創設の功労者、伝記は「宇治山田市史」

註2) 神苑会の業績は「神苑会史料」明治44年神苑会清算人事務所刊「同補遺」「神宮・明治百年史上巻」「大神宮史要」「宇治山田市史上巻」などにあり。

註3) 大岩芳逸(1850—1906)尾張の人、伊勢で医者をする。伊勢に博物館の創設を初めて言い出し、家業を忘れて奔走する。伝記は「おもかげ」大岩よし著大正11年刊あり。

註4) 田中芳男の農業館に於ける功績は「神苑会史料全」に主としてある。

註5) 「わが国近代博物館発達資料の集成とその研究 明治編1」日本博物館協会編

「本邦博物館事業創業史考」大久保利謙(立教大学学校・社会教育講座編「MOUSE ION」No.17 昭和46年6月発行)

「田中芳男のサボテン研究」奥 一 著 昭和31年刊、謄写限定30部

「無私の物産学者 田中芳男」樋口秀雄(雑誌「日本及日本人」昭和46年玄冬号)

註6) 伊藤圭介(1803—1901)本草学者、植物学者 日本最初の理学博士

「経歴談」に嘉永4年(13才)に伊藤圭介翁の所に入学とあるのは安政4年の誤りと思われる。

註7) 「日本の古代米」佐藤敏也著、雄山閣 考古学選書1、昭和46年刊

註8) 農業館旨趣「開設ヲ要スル旨趣」とはほぼ同内容であるが、農具の蒐集と種苗交換所と海外云々の項がなくなり「農作、種樹、漁獵、牧

薯、養虫類ノ産物並製品及器具各類ノ標本模
形等ヲ蒐集シ傍ラ図書統計表其他農書ヲ取藏
シ觀覽ニ資ス」と変化している。

註9) 明治33年の農業館列品分類

「穀豆類・菜葉類・香辛類・清燂類・製品類・
綿絮類・纖維類・製紙料・染料類・油蠟類・
各用類・牧草類・藥材類・木竹類・模形類・
繭絲類・畜養動物・野生動物・肥料類・農具
類・水産類・漁獵具・神祭具・図書類の24類
と附屬館工芸品」

註10) 明治44年の農業館列品分類

38類に増している。細分類されたものは、茶
類・沙糖類・醸造類・貯藏食品・烟草類・木
材・竹材・園芸類・種子類・有毒植物・有害

植物・土性地質・昆虫類・掛図類。

註11) 「野外博物学者 畔田翠山」上野益三
(日本及日本人、昭和46盛夏号)及び
「七六展記念誌」の列品解説参照。

註12) 堀田竜之助「七六展記念誌」には達之助とあ
る。翠山に関しては「貝の話」田中芳男著
明治39刊にあり。

註13) 「神苑会史料全」

註14) 「農業館列品目録第2版」田中芳男編
明治44刊による。この掛図類は伊勢湾台風の
ためほとんど汚染、残念ながら廃棄された。

(1) 1971年12月10日受付

(2) 伊勢神宮権祢宜・神宮司序弘報課

武州歴史民俗資料館の活動

The Bushū Historical and Folklore Museum

白井孝昌

Takamasa Shirai

- | | |
|------------------|----------------|
| 1. 目的 | 5. 昭和54年度の利用状況 |
| 2. 施設及び特徴 | 6. 昭和55年度の計画 |
| 3. 展示資料 | 7. 将来計画 |
| 5. 昭和54年度の資料収集状況 | 8. むすび |

There are many kinds of museums, from both the point of view of ownership and content, The Bushū Museum was established on November 23, 1978 under private ownership, for the purpose of collecting, storing and exhibiting local cultural properties, show the implements and techniques used in pre-Modern times to till the soil and to make noodles, among other aspects of local life. In the future we hope to solve many of our budgetary and curatorial problems and to improve our ability to illuminate local culture and history. Part of this work will include conducting tours, such as the one last year given to 124 students from the Outsuma Women's College.

1. 目的

この地域も今のうちなら、歴史・民俗資料も豊富に残っている。どこかでこれらの資料を収集しなくては次第に消失すると考え、この施設を設置するに及んだ。幸に私が、この母の生家の土蔵を引き継いだもので、その実現をみるにいたったのである。

資料館前に建つ看板を読めば、その目的は理解できると思う。そこには「設立の趣旨」として「小丹波村名主原島家で使用した土蔵と、そこに保存されていた内部資料を永久保存し、あわせて急速に失われつつある歴史・民俗資料を収集・保管・展示し、先人の残した文化財を後世に伝えようとするものである」と述べている。

2. 施設及び特徴

建物は明治26年に建築された杉皮葺2階建の土蔵で、20坪（約66㎡）の広さを持つ。1階を民俗資料に、2階を歴史資料の展示場に

用い、内部及び外部の構造及び材料は、修理にあたっては変更しない方針である。土蔵は明治期のこの地域の建造物として貴重なもので、また資料保存のためにも最適なものとなっている。

展示されている資料は、小丹波村名主原島家で使用していた資料を中心に収集されたものが加えられ、約1万点（推定）ある。とくに1軒の家で使われていた資料が残っていたので、まとまってあるのが特徴と言えよう（膳50台1組とか椀50コ1組など）。その他、歴史資料の中には、歴史上著名な人の墨跡や絵画類、刀剣類などに貴重なものが含まれている。

昭和53年11月23日に私設の資料館として開館し、現在、8人の顧問を擁し、館長兼学芸員の私が館の運営にあたっている。

3. 展示資料

- 1階：民俗資料

- ・衣……ミノ・ワラジ・檜笠・鏡など
- ・食……碗・膳・重箱・鍋・ザルなど
- ・住……神棚・長火鉢・行燈・箱枕など
- ・農耕……フングワ・クワ（各種）など
- ・その他……山樵・漁撈・養蚕などの資料
- 2階：歴史資料
 - ・郷土資料……原島家文書・日記・小切手・根付・印章など
 - ・増田家資料……御鷹掛御用日記・御用向日記・水深村検地帳など
 - ・歴史資料……大塩平八郎書簡・書幅・著書・墨跡・刀剣など
 - ・その他……壺（越前・瀬戸黒）・タンス・ケンドンなど

4. 昭和54年度の資料収集状況

- 5月・川井村から、笠2コ・ザクリ1台
その他5点寄贈。
- 6月・小丹波村から、ザクリ2台・揚げ
梓1台その他6点寄贈。臼1台・
杵3本・フングワ1本寄託。
- 7月・小丹波村から、格子戸2枚、魚す
くい1コその他3点寄贈。
- 8月・丹三郎村から、蚕棚1組・簇15コ
このめ27コ・桑くれ台3台・クワ
15本・フングワ1本その他13点寄
贈。千歯コキ2台・万石どおし1台
その他4点寄託。
- ・川井村から、マエビキ1丁・ノコ
ギリ（首長）1丁・足踏脱穀機1台
寄託。角行燈その他37点寄託。
- 10月・小丹波村から、千歯コキ1台・自
在鉤1台・ヒキウス1台・唐箕1
台・クズハキカゴ1組その他29点
寄贈。
- 11月・小丹波村より、唐箕1台・提灯1
丁・マワシガマ2丁その他4点寄託。

資料は増加の一途をたどっているが、資料の分類はまだ手をつけたばかりで充分に進んでいない。しかし、寄贈・寄託を受けたもの

は、資料ごとにすぐラベルと名札をつけて、どこから入手したものかすぐわかるようにしてある。



写真1. 資料館前での説明



写真2. フングワの実演

5. 昭和54年度の利用状況

毎月の入館者は、開館日が少ない関係から数人ということもあった。しかし、団体の利用として昭和54年4月22日に大妻女子大学国文学科124名が利用している。資料館としても最大の行事だったので、以下それについて説明したい。

大妻女子大学国文学科は1年生のオリエンテーション旅行としてこの資料館を利用するので、私も太学側と連絡を密にとって計画をつくりあげた。次に示すの



写真3. うどん作りの実習

は、当日の日程表である(図1)。

10:22	古里駅到着
10:45	神社前集合
11:05	大学・館長あいさつ
	資料館前での説明 歴史資料 民俗資料
12:20	館内見学
12:50	昼食(熊野神社) 熊野神社舞台の説明
	畑でフングワの実演
13:30	小麦をヒキウスで引く うどん作り実演
14:30	うどんの試食
14:45	人形浄瑠璃の解説 傾城阿波の鳴門 (中学校講座)
15:40	あいさつ
15:50	
16:05	古里駅出発

図1. 大妻女子大学国文学科1年生
オリエンテーション旅行日程表
(昭和54年4月22日実施)

当日は大妻学院視聴覚センターから、職員とビデオ2台が来て、1日の行動を全て収録した。フングワ及びうどん作りの実演は土地の方に協力をねがい、人形浄瑠璃は神奈川県的重要無形文化財に指定されている厚木市林座に来てもらい上演してもらう。

今回の企画はやや盛りだくさんのところもあったが、バラエティーに富んだものになると、どうしてもこのくらいのものになる。とくに気をつけたところは、単なる見学でなくて何かひとつ身につけて帰ってもらうことである。

この行事を終了して感じたことは、先人の生活に大変興味を持っていることである。そして、ひとつひとつの資料をわれわれ以上に新鮮な目で見ていることもわかった。ガラスごしでなく、じかに祖先の生活に触れたことが、学生たちに新たな感動を起こさせたようで、企画者の意図も理解されたのではなかろうか。次に感想文を紹介しておく。

この資料館には大塩平八郎のものなどかなり歴史的に貴重なものも見られたが、

やはり見どころとしては民俗資料としてのもの、だったようだ。一番古い物では戦国期から江戸、明治、大正、昭和初期あたりまでの農村の人々が使ってきた民具、農具など、それは本当に素晴らしいとしか言い様のない生活の知恵の結晶であって、かつて農民・村民などが日常生活用具として用いたこれらの品々は、加藤清正の愛用した何某とか家康の書いた何某とか歴史的に貴重とされる陳列ケースにきちりと収められたものよりもずっとずっと大切なもののように感じ、かえって歴史の重みが身近に感じられた。幕末期ごろの漆塗りが少々剥げかけたお椀で、石臼で粉を挽き人手で作ってくれたうどんをいただいたとき幕末のお百姓さん達もこの椀でもってこうしてうどんを食したのかなあと思い、心に湧き出てくるものを感じずにはおられなかった。(中略)プレハブ住宅やインスタント食品では味わえないこの生活をどうして大部分の日本人は捨ててしまったのであろうか。都会生活の“隣は何をする人ぞ”精神と違って古里村の人々は連帯感をもってこの村を盛り立ててゆこうとしている姿勢も私たちに接する態度から察してもよく感じられた。この研修旅行で強く思ったことを一言で表すとしたら、発達しすぎた文明をこれからどうしてゆくかという方向性を、このような昔の生活の中にこそ見出すべきなのではないかということになる。

〔剣地計子〕

(前略)幾時代も経て尚現在も通用する品々。我々の生きている現代にそういうものは果してあるだろうか考えた時ただただ、今この時一瞬にだけ生きようとしている私達を発見する。私達は機械文明の持つ便利さと引き換えに私達にとって、人間として生きていくために大事な

もの、心、をなくしてしまったのかも知れない。どの時代にも通用するものの持つ本物性、今我々が追い求めている本物というものを、普段不便で遅れていると思っていた昔の人が持っていたということは大きな驚きだった。歴史を持つものの重みを感じた。過ぎ去った昔ばかり追いかけるのではないが、愚かしく現在流れている時の流れにだけ身を任せるのではなく、自分の経てきた人生の歴史、そしてここに武州歴史民俗資料館のように多くの人々の歴史をいつも心のすみにとどめておくことは、とても必要なことだと思った。

〔塩沢浩子〕

まさに、われわれが忘れかけていたものを鋭く指摘しているのではなからうか。

なお、5月～11月まで、大妻学院視聴覚センターにおいて、この計画を推進した服部旦氏、センターの佐藤一氏及び私の三者で、収録ビデオの編集を行ない「うどん作り」「フングワの実演」「人形浄瑠璃・傾城阿波の鳴門」が完成した。

6. 55年度の計画

- ① 引き続き資料の収集を行なう。
 - ・すでに2月にも大型の雛1組・大戸などの寄贈があいついでいる。
- ② 3月より地バタを作成（復元）する。
 - ・土地の大工さんが地バタ（青梅に現品あり）の寸法をとり、材料も購入してある。本年度は無理だが、来年度には織るようすをビデオにとる。
- ③ 本年中に収蔵庫を増設する必要がある。
 - ・予算がないので、プレハブの建物をつくり、そこへ民俗資料を収納する。
- ④ その他
 - ・地域理解を求めるため、公民館で編集されたビデオの試写会を行なう。
 - ・関連機関の協力を求める。

7. 将来計画

- ① 民族資料を実際に使える施設にする。
- ② 民族資料をビデオに収録し、資料集にまとめ保存する。
- ③ 資料館紹介のビデオを作成する（現在作成中）。
- ④ 団体利用を推進し、わが館独自の企画を行ない、効果的な資料の利用と活用をはかる。
- ⑤ 地域と密接に結びついて、お互いに協力をして行く。
- ⑥ 関連機関の協力を求める。

8. むすび

わが館の性格と活動を概観してみたが、これから一歩づつ着実な歩みを進めたいと思っている。

いま最も考えなくてはならないのは、用地の確保と建物の建設である。資料は多くの人たちの協力で次々と増加していくのだが、収納場所がなくなって困っている。早急にプレハブでも建てる必要がある。購入資金はないので、土地を貸してくれる人を探している状態である。これが実現すれば、資料館の活動も飛躍的に広げることができる。また、毎日開館できるような体制に順次もって行くことを検討する必要がある。

大妻学院視聴覚センターとの協力関係は、今後も永続させ長期的な見通しでひとつづつ企画して行きたいと考えている。現在、進めている資料館紹介のビデオが完成したら、資料ごとのビデオ編集に着手する予定でいる。

まだ1年余りの活動しかないが、今後もわが館の特徴を生かした発展のしかたを考えたいと思っている。

付記

■ 見学希望者は事務局へ御連絡ください。
随時開館します。

所在地：東京都西多摩郡奥多摩町小丹波439
事務局：神奈川県厚木市上荻野4774

TEL. 0462 (41) 0749

- (1) 1980年2月5日受付
- (2) 武州歴史民俗資料館長

國學院大學博物館學紀要 1968年 第1輯

特集・博物館と教育

発刊の辞	樋口 清之
社会教育と博物館	池田 秀夫
博物館教育論—序説—	下津谷達男
近代博物館変遷史にみる教育的役割	
—主として社会教育における博物館理念の思想史への試論—	加藤 有次
視聴覚教育と民俗館の展示	富田竹三郎
国立博物館の性格 —京都博物館の場合—	景山 春樹
国立科学博物館の教育活動	椎名 仙卓
天理参考館の教育活動について	近江 昌司
財団法人横浜海洋科学博物館の教育活動	丸山 晴久
博物館学講座概要	加藤 有次
博物館学講座について	
昭和43年度博物館学講座受講手続き及要綱	
考古学資料室概要	加藤 有次
博物館関係在職院友名簿	

國學院大學博物館學紀要 1969年 第2輯

特集・博物館と資料

博物館資料の分類例	樋口 清之
博物館資料に関する覚え書	下津谷達男
博物館資料の修理と製作	加藤 有次
信州松本旧開智学校	佐藤 玲子
〈講演会要旨〉	
イギリスにおける博物館の現況とロンドン国立博物館	
—英国ロンドン博物館長 D. B. Hardin 博士—	小山 修三
博物館学講座要綱（昭和44年度）	
國學院大學考古学資料室概要	金子 皓彦
社会教育関係在職院友名簿	

國學院大學博物館學紀要 1970年 第3輯

特集・博物館と地域社会

博物館社会学（序）—その基礎論—	倉田 公裕
博物館と地域社会	山崎 淳子
統計にみる女性の入館者動向 —Y館を中心として—	小野 礼子
根津美術館における茶道文化十講 —聴講生の地域性について—	矢崎 格
地方公立美術館の当面する諸問題 —広島県立美術館施設の場合—	倉橋 清方

長崎県立美術館の活動－展覧会事業と定期観覧券の発行－	下川 達弥
徳島県博物館の活動	山川 浩実
熊本市立博物館の活動－人文科学－	富田 紘一
國學院大學考古学資料室の資料貸出状況－集計からみた大学博物館活動－	樋口清之・加藤有次・小池映子
博物館学史序説－博物館学に関する概念－	加藤 有次
博物館学講座要綱（昭和45年度）	
社会教育関係在職院友名簿	

編 集 後 記

本博物館學紀要の発刊は、今日より10余年前に遡る1968年のことである。その後各年に第3輯まで刊行してきたが、ここに至って久方ぶりに第4輯を斯界に送る運びとなった。その理由は、加藤教授が巻頭に記した如くである。

本輯を刊行するにあたり、昨年古稀をむかえられた樋口清之先生の今日までにわたる本学博物館学講座に対する御精力と共に今後の御健勝を祈念する意味で「樋口博士古稀記念号」と銘うつことにした。

まず加藤教授、森山先生と拙者によって、不動産物（遺構・層位）の考古学資料の造形保存法とその博物館資料の活用性について述べ、また青木先生には従来の土器類の復元に用いる石膏に代って New Fighter-5, No.28 という新補填材の有効性を発表していただいた。次に拙稿として小平市鈴木遺跡の調査経緯にもとづき、埋蔵文化財の大衆的理解と共に遺跡を学術及び教育資料として活用するにはどうすべきかを博物館学的発想を主柱にして考察してみた。そして矢野先生には我国博物館史上で極めて意義深い神宮農業館の創立とそれに関連した田中芳男について文献解題的に論考していただいた。氏には玉稿を第3輯刊行直後の1971年に賜わっておきながら、今日まで掲載が遅れてしまい深謝の念にたえない気持である。最後に白井先生からは日頃の博物館活動についての具体例を述べていただくことができた。

このたび、本博物館學紀要第4輯が刊行に至ったのも多くの院友諸先生の御努力と御協力のおかげであり、ここに厚く謝意を申し上げる次第であると共に、今後続刊するにあたり、皆様方の玉稿をふるってご投稿の程お願い申し上げます。（金山記）

きぬがさ

蓋

和歌山県橋本市陵山古墳出土 高76.5㎝

ほんらい蓋は、貴人の頭上を覆いかける行列具として用いられたものであるが、埴輪としては威儀の具としての性格が強調されている。中には華麗な直弧文が描かれ、この種の埴輪の重要性を示しているものもある。また、同様な機能を有するものとして、盾・靱・翳などの器財埴輪があり、これらは4世紀末から5世紀初頭にかけて隆盛を極めた。

この蓋は二条の凸帯が巡る円筒状を呈す台上に、二つの段を有する笠をのせ、その上に四手状にのびる鱗付きの稜飾りが施されている。さらに笠の中央部には飾り羽根を表した4枚の鱗付き羽根を十字形に組み合わせ頂飾りを軸穴に挿し込み、高度な技術を駆使し、見事な構造美を創出している。

このような例は京都府宇治市庵山寺古墳、奈良県日葉酢媛陵から発見されている。本学考古学資料館蔵。

(青木 豊 記)

國學院大學

博物館學紀要 第4輯

発行日 昭和55年3月31日

発行所 東京都渋谷区東4-10-28
電話(03)409-0111(大代表)
國學院大學博物館学研究室

編集兼代表者 加藤 有次

印刷所 東京都豊島区高田1-12-9
泉印刷株式会社

Bulletin of Museology, Kokugakuin University

HAKUBUTSUKANGAKU-KIYO

1979, No.4

CONTENTS

An Dedication to Dr. Kiyoyuki Higuchi	Yuji Kato	1
Vita of Dr. Kiyoyuki Higuchi		2
One More Step Forward	Kiyoyuki Higuchi	3
Methods for Preserving The Immovable Features of Prehistoric Sites	Yuji Kato, Tetsukazu Moriyama, Yoshiaki Kanayama	4
A New Method for Reconstructing Archaeological Objects — Particularly Pottery —	Yutaka Aoki	25
Archaeological Excavation Based on a Museological Concept — Suzuki Site, a Case Study —	Yoshiaki Kanayama	36
History of "The Ise Jingu Agricultural Museum"	Ken'ichi Yano	46
The Bushū Historical and Folklore Museum	Takamasa Shirai	55
Cover Photograph, Haniwa —— Collection of the Archaeological Museum of Kokugakuin University		

The Museum Study Room

KOKUGAKUIN UNIVERSITY

Shibuya, Tokyo, Japan